

Fate/New Dawn

まーく

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

衛宮士郎が首領パッチを召喚しちやった・・・というお話。

注) 首領パッチが本格的に出てくるのはプロローグ以降からです。

目次

0.	プロローグ	1
1.	首領パッチvsランサー	38
2.	遠坂凜の首領パッチに対する考察	
		54
3.	首領パッチ、言峰教会へ行く	
		66
4.	狂戦士	80
5.	同盟	106
6.	親友と騎兵	118
7.	首領パッチvsアサシン	137
8.	神代の魔術師	153
9.	キャスターvsランサー	179

0. プロローグ

月光が、蒼き死神の姿を照らし出す。

鮮血の如く紅き槍をもって、俺の命を刈り取らんと歩を進める。

相対するは、

オレンジ色のなんかトゲトゲがいつぱい付いたボールに手足が付いたような変な奴。

その手には、俺がスーパーで買ってきたネギが握られていた。

死神から放たれている極大の殺気は、俺がまともに息をする事さえ許さない。

男の目を見る。そこには、何の感情も宿っていないかった。怒りも、悲しみも、戸惑い

も。そこにあるのは、俺たちを、『殺す』という意志ただ一つ。

男がただそこにいるだけで、手足が震える。足元が覚束なくなる。呼吸が出来なくな

る。

しかしオレンジ色の奴は、そんな事など意に介さず、男を馬鹿にしているかのよう

に、ネギでゴルフの素振りをしているだけだ。……いや何やってんだコイツ。

月明かりを、雲が覆い隠す。

両者の姿が、影に飲まれる。

その瞬間、蒼と橙が、ネギと魔槍が、激突した。

何なんだこの状況は……。

どうしてこんな事になっているんだ——

「衛宮、必要とあらば、何かを捨てる事が出来る人間になりなさい」

隣で歩いていた葛木先生が、唐突にそんな事を口にした。葛木先生が誰かに何かを諭すなんて珍しい。どうしたのだろうか。

「例えば、お前は前回の期末テスト、ほぼ全ての教科において平均点を下回り、赤点の教科もあつたそうではないか」

「え!! その情報をどこで……」

「以前藤村先生がおっしゃっていた」

藤ねえっ!! なにバラしてやがんだっ!! まあ、人に聞かれて困る点数を取った俺も悪いけどさ……。

「人の能力には限界がある。遠坂のように優秀ならば別だが、すべての教科で良い点を

取るなど普通の高校生には不可能だ。だから衛宮、お前の得意科目が何かは知らないが、苦手な科目も得意な科目も同じくらい勉強するのではなく、ある程度比重に偏りを持たせるべきだ」

「はあ」

要するに、『今回の学年末テストでいい点を取れるように勉強方法を変えろ。そしてもうすぐ三年生になるのだから進路とか文系理系とかも真面目に考えろ』ってことか。

「葛木先生にしては珍しく、回りくどい言い方ですね」

「なにも勉強に限った話ではない。衛宮、人助けをするのは構わないが、常日頃から誰もかれも助けて、取捨選択が出来ていないのはお前の悪い癖だ」

「……………」

取捨選択。

誰かを救うという事は、誰かを救わないという事だと、親父が死ぬ前に言っていたのを思い出す。

昔は分からなかったが、今ではもうその言葉を理解できる。けど、頭で理解は出来ても、心では納得出来ない。

誰も見捨ててる事なく、全ての人を救う。誰に何を言われようとも、その理想を諦める事は出来ない。今も昔も、そしてこれからも、それだけは決して変わらない。

だから俺はこの夢を、今も追い続けている。

……追い続けてはいるんですけども、どれだけ頑張っても、古文と二次関数は救えなかったんですよ……そして多分、勉強する教科を絞ったとしても、大して点数は伸びない気がする……。

けど、勉強だけの話でないのなら、どうしていきなりそんな事を今、俺に言うのだろうか。葛木先生はそういうタイプじゃないと思ってたけど。

「そして今日、お前は日直であり、朝礼まであと数分しかないにも関わらず、私のプリント運びを手伝っているわけだが」

それが本題かよっ！

「げ、忘れてた。なんでそれを知って……タイガーか。いや、これ運び終わったら急いで向かいます」

「それが駄目なのだよと言っている。お前は今、私の手伝いを放棄して、日直としての責務を果たすべきなのだ。お前のやり方では、両方とも中途半端な結果に終わってしまう。行け。このくらい私一人でも問題ない」

「……あの、すみません。中途半端になっちゃって」

俺は葛木先生に頭を下げ、急いで教室に向かった。

「何かを捨てる事が出来る人間になりなさい、か」

俺が捨てることの出来るもの。それは一体、何だろうか。

相も変わらずチンパンカンパンな授業をノートだけは機械的に取っていたら、あつという間にホームルームの時間になり、担任の藤ねえが勢いよく入って来た。その勢いのまま教卓にあがろうとした所、床に落ちてた消しゴムを踏んで盛大にズッコケ、教卓の角に頭を思いっきりめり込ませて気絶した。

普通の人間なら即死だが、まあタイガーこと藤ねえは普通の人間じゃないので大丈夫だ。もしかしたら、アイツには未知の力が働いているのかも……まあ、そんな訳ないけど。

クラスの皆は、またかよ、という顔をした後、藤ねえを気遣うでもなく、ぞろぞろと教室を出て行った。

さて、バイトに行く前に、生徒会の手伝いでもしようかな。

夜も深まり、街の明かりも静寂と共に消え始めた。

寒空の下、空気が透き通っているのだろうか。冬の大三角形程の明るさの星ならば、

うつすらとだが見ることができない。

ハッキリと見えないのは、申し訳程度に夜道を照らす街灯のせいだ。

その街灯に照らされながら、家路を歩む。

バイトが長引いてしまった。桜はもう帰ってしまったているだろう。今日の晩飯は俺の担当なのに、悪いことをしちまったな……。

坂道に差し掛かった時、ふと、目線を上にあげると、坂の上、道路の真ん中に、白い長髪の少女が立っているのが見えた。

この道は歩道もないし、今あの子が立っている交差点には信号がついてないのだ。危ないから注意してあげないと。左から大型トラックも来てるし。随分スピード出してるな。

——あれ？ あの運転手、寝てないか……？

気が付くと、俺は全力で走り出していた。

女の子が、思い出したかのように口を開く。

「早く召喚しないと、死ん」

「危ないっつっ！！」

咄嗟に女の子を突き飛ばす。

直後、強烈な衝撃が体全体に走った。

薄れゆく意識の中、

あの女の子は無事なのか、それだけが気がかりだった。

ふと、目を覚ます。

そこには、見知らぬ白い天井があつた。埋め込まれている空調が、ごうごうと音を立てながら生暖かい風を吐き出している。少し埃っぽい風だ。この空調はあまり掃除されていけないのか、そんな事を思った。

「じゃ、なくて。ここはどこだよ……」

上体を起こし、周りを見てみる。等間隔に並んだ誰も使っていないベッドが4つ、カーテンの仕切り、窓の外に見える、新都の町並み……。

ここは、新都にある大病院のようだ。どうしてこんな所に？

昨日は——頭に浮かび上がってきたものは、白髪の少女とトラック、そして、強烈な痛み。

「そうか、そりや病院に運ばれるよな」

全身が、特に頭が鈍く痛む。大型トラックに衝突したのだ、これくらいで済んで良かつ——

いや待て、なんで俺これくらいで済んでいるんだ？　そもそも、どうして生きているんだ？　普段から鍛えているおかげ、では無いよな。

いや、そんな事は今はどうでもいい。それより、あの子は無事なのか？　突き飛ばしてしまっただけ……。

「おはよう。元気そうだね、お兄ちゃん」

ベッドの脇に、あの白い少女が立っていた。

お見舞いに来てくれたのだろうか。見た所大きな怪我とかは無さそうだ。

「君は——いや、無事でよかった」

なんだろう、何か言いそうになったけど、特に何も言うことは無い。

「うん。それじゃあ、またね」

そう言つて、少女は俺に背を向けた。なんかアツサリしてるけど、まあ、特に話す事もないし、こんなものだろう。彼女が扉の前に立った時、扉が勝手に開いた。

そこには、慎二が立っていた。慎二の姿を認めると、少女が彼に話しかけた。面識があるのだろうか。

「マキリの子倅ね。いや、今は間桐だったかしら。此度は貴方が出るの？」

「……僕はお前の言う『マキリ』でも『間桐』でもない。アンタが言ってるのはジジイの方だ。そして次の当主は妹の方だ。だから二度と僕に関わるな」

「そう」

少女はそう言うと、病室を後にした。何の話だったのだろう。慎二に視線を投げかけると、

「お前には関係無い」

と言われた。まあ、慎二の家は名家だし、色々と外部の人には言えない事情も抱えているのだろう。

「そんな事より、お見舞いに来てくれてありがとう、慎二」

「元氣そうで残念だよ、衛宮」

ああ、相変わらずの口の悪さだな。

その後、なんてことは無い話をしていたら、一時間ほどたった。ふと、慎二が俺の右手をじっと見ているのに気が付いた。

「衛宮、その右手は」

「ああ、擦りむいたのかな。包帯が巻いてあるし……どうした？」

慎二は、一瞬だけ何かを考えた後、俺に右手の包帯を取ってくれと言ってきた。包帯の下には、やはり赤い痣みたいなものが出ていた。

「これがどうしたんだ？」

「いや、何でもない。」

「？ 別にいいけどさ」

「……長居しすぎた。じゃあな」

「ああ、またな」

そう言つて、慎二は帰つて行つた。

その後、藤ねえや桜が見舞いに来たり、トラックの運転手が謝罪に来たり、医者が診察に来たりした。医者によると、明日には退院できるらしい。

皆が帰つた後、病室で一人、何もすることがなく、暇になった。

「寝るか。まだ昼の二時半だけど」

目が覚めた。時計を見る。深夜二時か。丸々半日も寝ていたわけだ。……こんな中

途半端な時間に目覚めしきまうとは。まずいな、すっかり熟睡したせいで、もう一睡もできな。完全に昼夜逆転してしまった。

さて、何をしようかと考えていたら、ふと、違和感を覚えた。何か明確なものに対してではなく、目の前の光景、いや、空間そのものに。

「？、いつもと違う場所で、しかも朝じやなくて夜に起きたから、かな」

まあ、どうでもいいか。よし、魔術の鍛錬をしよう。入院しているからといって鍛錬をサボったら親父に叱られる。気合いを入れて、自己の精神に埋没する。いつも以上に、今日は集中できそうだ。

新都にある病院の屋上、目の前で、落下防止の鉄柵に手を置く私のマスターに、声をかける。

「よろしいのですか？ シンジ。神秘の秘匿のこともありますし、それに敵に手の内を晒すことに」

少年は、明かりが消えゆく街並みを見下ろしながら、少し、溜息を吐き、心底面倒臭そうに口を開いた。

「別に一般人を巻き込むわけでも、大きな爆発が起こるわけでもない。霊体、非自然的存在に對してのみ働く結界……キャスターも同じようなものをずっと張りつばなしにしてやがるんだ、本来のお前の宝具でもないし、手の内もクソもないだろ。」

……確かにそうだ。これは、私の宝具に、シンジが手を加えたものだ。柳洞寺にある結界を参考にしたと言っていたが、そう簡単に模倣できるものなのだろうか。確かに性質は私の宝具と似てはいたのだろうが……。

それにしても、この冷淡な少年が、友人を、しかも敵になるかも知れない者の為にここまでするとは思わなかった。

彼はシンジにとつて、それ程大事な存在だという事なのだろう。

「分かりました。では、始めます」

魔方陣に魔力を流し込む。目視できぬほどの薄い結界が、病院全体を包み込む。

翌朝。結局違和感の正体は何か分からなかったけど、無事退院はできた。一旦家に帰って、昼から学校に行くことにした。

校門をくぐった時、また何か違和感を覚えた。病院の時と同じような。

「……もしかして頭がまだ治りきっていないのか？」

時刻は丁度昼休みに入ったところだった。食堂で昼飯を食べ、授業の準備をする。

一日休んだだけなのに数学と古文はもうさっぱり分からなかったけど、英語や社会は、藤ねえと葛木先生が俺の為だけにプリントを作ってくれていたお陰で何とか追い付けた。ありがたい話だけど、勉強しろよ、という無言の圧力を感じる……。

そうこうしているうちに放課後になった。藤ねえが、帰ろうとしている慎二に声を掛けている。

「……何ですか？ 部活はしばらく無い筈ですが」

最近、冬木市は物騒な事件が続いている。犯人がまだ見つからない一家惨殺事件、多数の行方不明者、頻発するガス漏れ事件……学校側も、生徒を夜遅くに帰すわけにはいかないのだろう。部活動は無期限で停止となっていた。

「いや、今日弓道場の掃除担当の美綴さん、風邪で休みなのよ。だから代わりにお願いしてもいいかしら」

「……………」

慎二は心底面倒臭そうに、溜息をついた後、大人しく首肯した。タイガー相手に拒否

権などハナからない事を知っていたのだろう。

トラが去った後、慎二に声をかける。

「慎二、掃除手伝うよ」

「いらない」

一蹴された。本当に嫌そうな声で。

でもまあ、慎二相手ではいつもの事である。何と言われようと、俺は手伝うだけだ。

「ちよつと生徒会で用事があるから、先に行っておいてくれ」

「来なくていいって言ってるだろ」

ハハ、相変わらずだな。

生徒会でストーブを修理した後、弓道場に向かった。久しぶりの光景だが、以前と全く変わっていない。

慎二は、黙々と床を雑巾がけしていた。入ってきた俺に見向きもしない。

さて、やりますか。掃除用具入れから雑巾とバケツを取り出し、黙々と掃除をする。二人の間には、何の会話もなかった。

三十分くらい経ち、粗方終わった所で、なんとなく、的を見る。久しぶりに射つてみたいなど、ふと思った。まあ、弓が無いから出来る訳がないのだが。

慎二が、唐突に口を開く。

「衛宮、お前弦張り直すの得意だったよな」

「え？ ああ、直して欲しいのか。いいよ」

慎二が、自分の弓を俺に渡す。

「掃除は終わったし、僕は帰る。弓は明日返せよ」

そう言つて、慎二は帰つてしまった。

「……ありがとうな、慎二」

さて、今日は、隅から隅まできっちり掃除しよう。その後、少しでも射をやつて帰ろう。

「……つと。もうこんな時間か」

真つ暗になつてしまった空を見上げ、まずいな、と顎に手を当てる。

見上げた空は白い雲に覆われ、月明かりを遮つてしまつてゐる。おかげで、今が何時ぐらいなのか全く判らない。

久しぶりに弓道場に来たという事もあり、ついつい掃除に気合をいれすぎてしまつた。これじゃあ、弓を引く時間は無いな……仕方ないか。

でもまあ、その甲斐あつてか、床には埃一つない。次に誰かがここに来て、気持ち

よく過ごすことが出来るだろう。

自分の努力で、他人が報われるならそれでいい。

「早めに帰らないとまずいな。最近、なんか物騒だし」

ここの所冬木はなぜか事件が多い。俺が被害者になっても何ら不思議ではないのだ。嫌な静けさの中、なんとなく、不気味な気分に襲われた。

また、今日という日が終わる。

太陽はとうの昔に沈み、街は静かな闇に覆われている。

時刻は、既に夜の八時。学校に残っているのは、わたしと……横に居る、甲冑姿の少女だけ。ブリテンの騎士王、セイバー、アルトリア・ペンドラゴン。わたしが今回召喚に成功したサーヴァントだ。

お父様が前回の聖杯戦争の折、もしもの時の為に用意しておいた予備の聖遺物を、何が出るか分からないまま使ったけど、これ程の大英雄を呼び出せるとは思ってもいなかった。

これが『予備』なのだ。お父様は一体、どれほど強力な英霊を使役していたのか、わ

たしには想像もつかない。

そんな彼女と、目の前の異物を見下ろしながら、わたしは静かに口を開く。

「セイバー、貴方たちつてそういうモノ？」

「……………」

対するセイバーは、無言。その沈黙が、何よりも雄弁な答えだった。

——結界。

古来より存在する魔術であり、基本的には術者を護る働きを持つ。一定の区域に作用し、範囲内への人目を避けるものから、踏み入った者へ何らかの束縛を与えるものまで、その効果は様々だ。

その中でも最上位のモノが、わたしの目の前には存在している。

堂々と描かれた刻印は、魔術師にしか見ることが出来ない。刻まれた文字は見た事も聞いた事すらないカタチだ。

魔術師であるわたしの知識に無いモノだが、それでもこれが桁違いの神秘で貼られたモノである事は理解できる。

そして、何より厄介なのは……この結界の性質が、“攻撃”である事だ。

おそらくは、生命活動に干渉する結界。まだ未完成のようだが、こんなものが完成す

れば、一般人はひとたまりもない。

いや、これは、下手したら私ですら影響をうけるかもしれない。結界というものは普通、地形・場所に作用するもので、自分の体に魔力を通して魔術師には効きにくい。ただこれ……しかも認識障害の魔術防壁のせい、これがどのようなもので、どれくらいの脅威なのか、大まかにしか読み取れない。

「……………」

朝のうちに異物の存在を探知したわたしは、夜になるのを待つてからセイバーと合流し、こうして結界を調べていた。

この屋上で、結界の起点、所謂呪刻は七つ目。当然全てを解除した……と言いたい所だが、これはもうわたしの手には負えない。発動の妨害くらいは出来るが、呪刻そのものの撤去は出来ない。

「」

セイバーは口を結んだまま開かない。しかしその険しい表情が、彼女の怒りを示している。

それも当然、と言えば当然だ。こんなモノ、まっとうな人間なら許容出来る筈もない。魔力を奪う、活動を制限する、なんて生易しいモノじゃない。精神や体力ではなく、魂そのものを奪う血の結界。

だが、魂なんてモノを手に入れた所で、それを扱える魔術師は存在しない。魂という概念は扱いが難しく、それを確立させた者は歴史上たった一人しか確認されていないのだ。

そんな集める意味のないモノを、大規模な結界を設置してまで奪おうとする目的。一般人にも、魔術師にも使い道のない魂が必要だとすれば、それは――

「――サーヴァントのエネルギー源、か。こんな事をするなんて、ほんとに英霊なのかしら」

セイバーが、感情を押し殺した声で答える。

「……確かにあまり好ましくない行為ではありますが、非常に合理的な手段ではありません。自らが有する魔力量の限界を理解し、効率的に魔力の確保を図っている。これを仕掛けたマスターは、ある意味正しい」

「……なによ、それ」

確かに、手段としては確かだろう。学校の生徒を丸ごと魔力に出来るのだ、効率だけを考えれば優れていることは間違いない。

だけど、その為だけに、何の咎もない一般人を何百人も虐殺していい筈がない。

それに、これを貼った奴は何も考えていない。

何百人もの一般人を巻き込む結界に、神秘の秘匿なんて要素は見当たらない。そんな

基本すら無視する魔術師なんて、よほどの馬鹿か、或いはとんでもなく自信がある者だけだ。

「——潰すわ。こんなものをわたしの土地で使おうなんて、癩に障るつたらありやしない」

「ええ。敵にむぎむぎ魔力を補給させる訳にはいきません」

セイバーの表情は険しいままだが、口から出る言葉は冷淡だ。

……恐らく彼女は、自らの判断と行動から個人的感情を切り離す事ができる人間なのだ。必要とあらば一般人を犠牲にする事も躊躇わないのだろう。

「……凜」

「分かってるわ。余計な心配は無用よ」

そう、わたしは魔術師としては甘すぎる。

そんな事、言われなくても分かっている。

取り敢えず、境界は消さなくちゃ。左腕を突き出すと、刻まれた魔術刻印が淡く光った。

「嬢ちゃんにソイツが消せるのかあ?」

その声に、身体が咄嗟に動いた。
振り返る。

身を包むのは、蒼い鎧。

愉快そうに吊り上がった口元は、粗野でありながらもどこか親しみ深さを感じさせる。
顔は笑っているが、こちらに向けられた目線は鋭い。そこに込められた殺気は、この

男が歴戦の戦士であることを示していた。
だが何よりも先に、その圧倒的な存在感が、それは人間ではないと告げている――

「まあ、オレにとつちやあどつちでもいいんだがよ。用があるのは、そつちの姉ちゃんの方だ」

隣に立っているセイバーは、既に臨戦態勢に入っていた。セイバーに用……という事は、コイツやつぱり――！

「サーヴァント……！」

「そうとも。で、それが判るお嬢ちゃんは、オレの敵ってコトでいいのか？」

背筋が凍る。

何でもないという風に、まるで世間話のように告げられたその一言。だがその言葉は、命を懸けた闘いの始まりを意味する。

まるで、蛇が鎌首を擡げているような。そんな、危険な感覚。

取り敢えず、離れなければ。魔術師ではサーヴァントには絶対に敵わない。冷静になれ。セイバーの邪魔にならない所は――

「……ほう、大したもんだ。年の割には度胸が据わっている。こりゃあ、ひよつとしたら少しは楽しませてくれるのか？」

男の腕が静かに上がる。

次の刹那、何も握られていなかったその手には……血のように、不気味な槍が現れていた。

「っ！ セイバー!!」

わたしと槍兵の間に入るセイバー。

その隙に、屋上の隅に駆ける。

「……何が目的だ、ランサー。何故我々が気付く前に攻撃してこなかった」

今まさに殺し合いが始まるうとしているにも拘らず、冷静な態度を崩さないセイバー。その言葉に、槍兵が答える。

「様子見、って所だな」

「そうか。では十分に見ただろう。満足して逝け、ランサー」

「ハハッ、血の気の高かった。三大騎士クラスの一つ、セイバーか。その上不可視の剣

……コイツは骨の折れる仕事だぜ——」

そう言いながら、身体に魔力で二つの文字を書くランサー。瞬間、全身を紅色の光が包み込む。

あれは確か、ルーン魔術か——？

「凜、ここであの男を切り捨てても宜しいですか？」

セイバーが、わたしに問いかける。

「ええ。……わたしは邪魔にならない所に……」

そう言って、一瞬、ランサーとセイバーが重なって見える位置に立つ。

(セイバー、床が崩れたら、一気に襲いかかって)

(——！ 分かりました)

左手を床に置き、刻まれた魔術刻印を起こす。

「in^直 einer^線 geraden^上 Linie

Material^構 der^成 Konstruktion^質

Zusammenbruch!!」

瞬間、ランサーとセイバーの立っていた場所が、塵となって消滅した。

「ほうー!」

「はあああああつ!」

即座に切りかかるセイバー。

今二人が降り立った場所は、廊下だ。ランサーのあの長い槍は、広い場所であればそのリーチが脅威となるが、スペースが狭い屋内戦闘においては足枷となる。大上段からの叩きつけや薙ぎ払いなどが使えなくなる為、武器のリーチが短いセイバーが有利に成るはず——！

「ハッ、いい考えだな、嬢ちゃん」

しかし、槍兵は動じない。槍の中ほどを持ち、苦も無くセイバーの攻撃を捌いていく。セイバーのパワーは、間違いなく聖杯戦争中最強だ。その踏み込みは床に亀裂を走らせ、その一撃は剣を振るうだけで学校全体が震える程だ。まともに受ければ槍を持つ腕が折れる事は間違いない。

まさに、重戦車の如き攻撃。

一撃、只の一撃槍兵が受けるだけで、勝負は決するに違いない。

だが、その一撃が決まらない。槍兵は攻撃を正面から防御するのではなく、いなして“いる”。剣先を逸らさせ、力を受け流し、微妙に真正面には立たないように立ち回っている。

この狭い廊下の中、槍を縦にも横にも出来ない状況であるにも関わらず。

何という技量。これ程の死線など、幾度となく潜り抜けて来たともいうのか。セイ

バーが攻めあぐね、状況を打開しようと、より威力の高い大振りな攻撃を繰り出し始める。

その隙を、槍兵は見逃さなかった。

「シツ——！」

攻撃の合間を縫って、鋭い突きが繰り出される。即座に防御するセイバー。

しかし、その槍は蛇のように曲線を描いてセイバーの胸に——からうじて刃が掠り、セイバーの肩に突き刺さった。

「な——！！」

「え！！ 今のって——まさか宝具！！」

槍が、現実では有り得ない軌跡を描いてセイバーを貫いたのだ。一体どんな……。

「ほお、初見で今のを防ぐか」

「つ……幻術の類か？ しかし私に並の魔術は効かない筈——」

「宝具でも幻術でもねーよ。今のは槍のしなりと目の錯覚を利用した『技』だ」

技！！ 曲がる突きなんて聞いたことも無い……これが『英霊』……しかし、ランサー

が人智を超える技を持つように、セイバーもまた常識を超えた能力を持つ。

「……へえ、傷が勝手に治るのか。しかも中々な早さだ。便利な体だなあオイ」

「悔るな、ランサー。先の技、最早私には通じない」

一度喰らっただけで、もうあの不可思議な技を見切ったのか。何という眼力。いくら攻撃を受けようとも、セイバーの体は自動で治癒され続ける。先の絶技も最早通じる事はない。このままいけば、ジリ貧になるのはランサーの方だ。

しかし、ランサーは余裕な態度を崩さない。

「そうかい。じゃあ他の技を使うとするかっ！」

先ほどまでとは一転、ランサーの猛攻が始まった。

凄まじい速度の連撃、最早わたしの目で追うことは出来ず、無数の槍が雨霰となつてセイバーに襲いかかっているようにしか見えない。

なんとという速さ、これがランサーの本気か。

しかし侮るなかれ槍兵よ、ここに居るのはかの名高きブリテンの騎士王なり——
連撃の中に紛れた一瞬の隙を突き、槍兵の槍を剣で無理矢理右へ逸らすことで、懐に入る。

「上手いッ！」

槍という武器は懐に入られたが最後、攻撃ができなくなる。リーチの長さ故の弱点だ。

咄嗟に右足の蹴りでセイバーの脇腹を狙うランサー。

しかしそれを読んでいたセイバーは左手の手甲でそれを防ぎ——膝から先の軌道

が突如変化し、ランサーの足がセイバーの側頭部に叩き込まれた。

「がっ!!」

勢いよく壁に叩きつけられるセイバー。

「なっ、嘘!! ブラジリアンキック!!」

ブラジリアンキック。エセ神父から少しだけ見せられた事がある。蹴り上げる軌道の途中で軸足を返す事で、腹部を狙った蹴りから頭部への蹴りに突如変化させるというものだ。

口で言うのは簡単だが、実戦で使うなんて、それこそ言峰クラスの格闘家でなければ出来ない最高難度の芸当だ。それを一介の槍兵が……?

「ほお、あの一瞬で頭を少しずらしてまともに喰らう事を回避しやがった。さっきのもそうだが、中々勘が鋭いねえ、姉ちゃん」

「セイバー!!」

「くっ……問題ありません、凜」

気丈に答えるものの、重心が安定せずふらふらとしている。頭部への強烈なダメージは、流石にすぐには回復しないのか。

……令呪を使うべきか? しかし、ランサーは何故か追撃をして来ない。

「……なぜ、とどめを刺しに来ないの?」

「だから言っただろ、『様子見』だって」

訳が分からない。ランサーのマスターは、敵を殺すなという令呪でもかけているのだろうか。しかしランサーの動きは、令呪で縛られているとはとても思えない。

……悔しいけど、まともにやりあっていたら危なかった。

セイバーの宝具は間違いなく最強だ。宝具の打ち合いになったら絶対に負けないだろう。しかし、この男の前では、宝具を解放する隙さえ無かった。

圧倒的な敏捷性。それに、さっきの蹴りの威力から察するに、その膂力は恐らくセイバーと同等……。

「嬢ちゃん、オレは優しいからよ、一つだけ忠告をしないとやる」

「え？」

そう言うと、ランサーは目にもとまらぬ速さで槍を回転させた。

ランサーがピタッと動きを止める。

その瞬間、天井が、壁が、窓ガラスが、全てがバラバラに切り刻まれた。

「え！！」

「凜！！」

セイバーに抱えられ、建物が崩れる前にグラウンドへ飛び出す。

振り返ると、わたし達が立っていた場所は完全に崩れ去っていた。

「まあ、そういう事だ」

隣には、いつの間にかランサーが立っていた。

「オレ達を、人間と同じ尺度で考えない方がいい」

そう、ランサーは槍を自由に振るえない訳ではなかったのだ。

建物の中のように、建物ごと切り裂く事ができるのだから。

ふと、ランサーが弓道場の方を向いた。

「あちゃー、まだ人が残っていやがったのか。神秘の秘匿ねえ。めんどくせー時代になつたもんだ」

そう言うと、ランサーはフツと姿を消した。

「ツ!! 追つて、セイバー!!」

無言で首肯するセイバー。こちらに向き直りすらせず、セイバーはランサーを追って疾駆した。

まさか生徒がまだ残ってたなんて……。

ああくそつ、なんて間抜けなのわたし!

今まで十何年、ずっとそんな失敗はしなかったのに、よりによってなんで今日に限つ

て……っ!

冷たい弓道場。

月明かりの下、セイバーは静かに佇んでいた。

その流麗な顔には、困惑の表情が浮かんでいる。その足元には……物言わぬ軀が、一つ転がっていた。

ツンと鼻を突く、錆びた鉄の臭い。

床に溢れた血だまりは、つい先程まで、その軀が生きていた事を物語っていた。

「……追って、セイバー。ランサーはマスターの所に戻るはず。こいつの手当ては、わたしが引き受けるわ」

「あの……凜、手当ては不要だと思います」

「……そう。死んだのね」

感情を押し殺す。これは、わたしの責任だ。

わたしがもつと気を配っていれば、こんな事は、避けられたに違いない。

「いえ、その……逆です。治ってるんです。私が近付いた時、出血が止まり、傷がひとりでに塞がったのです」

「……はあ。」

もしかして、あの男か？ だけど一度殺してから治療するなんて、意味不明にも程が

ある。

一体、あの男は何を考えているの……？

「と、取り敢えず、記憶を部分消去して、服と床に付いた血を綺麗にするわ。セイバーはランサーを追って頂戴」

「……分かりました」

困惑の表情を浮かべたまま、セイバーは走り去った。

一応、生徒の顔を確認する。

「——え？」

時間が、止まる。

「嘘でしょ。なんで、アンタがここに——」

夢を見る。

剣だ。

誰もいない荒野に、数多の剣が突き刺さっている。

その光景は、どこまでも、俺の心を虚ろにさせる。

寂しい、淋しい、サビシイ。

小高い丘に、傷だらけな白髪の男が独り立っていた。
ここはきつと、衛宮士郎が行きつく果てだ。

「……………」

目を覚ます。

見慣れた、懐かしい天井がそこにはあった。

「げ、寝ちまつてたのか。もう真っ暗じゃないか。……まあ、桜は『今日は家に行けないんです』って言ってたし、タイガーはどうでもいいし、別にいいか」

さて、今夜は鍋で済ませてしまおうかな。商店街は……もう閉まつてるか。スーパーがまだ空いてるといいけど。

ようやく家についた。なんか長い一日だったな。

さて、カギカギ、寒いし早く入——

「まだ生きてやがったのか」

ぞつ、と背筋を冷たいもので撫でられたような感触。
からん、と。鳴子のような音が響き渡った。

振り返ると、蒼い鎧を纏い、真紅の槍を持った男が立っていた。

「え？ どなたですか？」

「……………ハア。あのお嬢ちゃん、人が好過ぎるにも程があるぜ。ほっときやあいいものを、ご丁寧に治療した上で記憶を消すとはな」

「？ 何の話、ですか？」

「どうやら頭のおかしい人のようだ。変な恰好してるし。警察を呼ぼうにも電話は家の中だ。ここは自分の身は自分で守る必要があるな……………」

男が動く。

取り敢えず、蔵まで駆ける。

武器になるような物が何かあるはずだ——

「そら」

「がっ！！」

左腕に、衝撃。

持っていた袋を落としてしまう。

「じつとしてろよ。仕方ねえが、嬢ちゃんに免じて記憶を消すだけにしてやる」
痛い痛い痛い。

男が何か言っているが、全く頭に入っていない。

武器だ。今すぐに武器がいる。

足元に、袋から落ちたネギが見えた。

咄嗟に拾い、強化を施す。

「同調、開始」
トレス、オン

ネギの造形を読み込み、空いている隙間に魔力を流し、一時的にその強度を上げる。

こんな簡単な事ですら、今の俺には難しい。

けれど、それすら満足に出来ないのなら、今まで俺は何をやつて来たというのだ――

！

「構成材質、補強」

……うまくいった。正直、全然集中出来てないというのに、何故かすんなりと強化できた。

滅多に成功しない強化魔術。強度を上げるというただそれだけの魔術だが、成功したのは何年ぶりだろう。

فقط、

「よっ、と」

あつけなく、俺の手から弾かれた。

いくら硬い物を持っていても、俺自身の力が全然足りていなかった。

なんなんだコイツの腕力は。ただの変質者じゃないのか？

「随分と初歩的だが、一応魔術を使えるのか。……ん？ この坊主が魔術師なら、神秘の秘匿なんて心配しなくてもいいのか？ まあ、一応消しておくか」

俺を消すと、男は言った。魔術の事も知っているようだった。

魔術師狩り、のような者なのか？

わからない。取り敢えず、蔵に向かつて走る。

走れ走れ走れ！

男が俺を殺すよりも早く、蔵にたどり着けた。

扉を閉め、鍵をかける。どうしよう、事態は一向に改善していない。

取り敢えず、朝までここに立て籠もれば——

扉に、何本もの線が走った。

瞬間、分厚い扉がバラバラになり——蒼き死神が、月明かりの下に照らし出された。「手間かけさせんなよ、全く」

——終わった。近くに武器に出来そうな物もない。

いや、武器があつた所で、鉄製の分厚い扉をバラバラにできる奴に勝ち目なんてない。

駄目だ。

「こんなバケモノ、俺なんかはどうこう出来る訳がない。」

あの日の夜と同じだ。

俺の力ではどうしようもない、理不尽な絶望。

ただ、願う事しか出来なかった。

この絶望を覆して欲しい。

願いは届いた。俺は救われた。

けど、俺しか救われなかった。

あの日死んでいった人たちの為に、

親父のように、心から嬉しそうな顔をするために、

俺は、絶望を塗り替えるような、正義の味方にならなくちゃいけないんだ。

だから、こんな所で死ぬわけにはいかないんだ。

「——お前みたいな奴に、殺される訳にはいかないんだ!!」

その瞬間、蔵の奥から大きな柱が飛び出してきた。

男がその下敷きになった。

「——へ？」

柱には、大量の粘着式時限爆弾と、

「た、助けてください……」

オレンジ色の、謎の生物が括りつけられていた。

1. 首領パッチ v s ランサー

「……へ？」

何だこの生物？　なんで我が家の蔵に……。

「いいから早く縄をほどけよおおお！！　もうすぐ爆発するぞー！」

「爆発？」

柱にくっついている爆弾に目を落とす。残り10秒――

「ええええええ！！」

急いで結び目を探す。

あつた。何故にちようちよ結び……。

「ほどけた！」

「脱出だああああ！！」

急いで蔵を飛び出す。

「伏せろおおおお！！」

その日、俺が十余年もの間、毎日魔術の鍛錬の場として過ごしてきた蔵が、盛大に爆

発した。

「ハア、ハア、ハア」

「助けてやったんだ、オレ様に感謝しやがれ！」

「ハア、……いや、助けたのは俺なんだけど……」

まあ、実際助かったのは確かなのだが。

「そーいやアイツ誰だったんだ？」

「分からない。けど、バケモノみたいな強さで、俺を殺そうとしてきたんだ」

「ふーん」

オレンジ色の奴は、興味無さそうにハナクソをほじくっている。いや興味無いなら聞くなよ……。

「オメー、名前は？」

「俺？ ……衛宮、士郎、だけど」

「ふーん」

「興味ないのね……その、お前の名前は？」

「聞いて驚け！ 恐れ慄け！ オレの名は……アイツ、まだ生きてるみてーだな」

「え？」

蔵の方を見る。

瓦礫の下から、あの男が這い出てきた。あれ程の爆発に巻き込まれたにも関わらず、その体には汚れはあれど傷一つ付いていない。尋常じゃない腕力といい、あの男は、人ならざる者なのか？

男の表情には、怒りもなく、戸惑いもない。ただ、なにか面白いものを見つけたような、薄気味悪い笑みを浮かべているだけだ。

しかし、その目に宿るのは殺意だ。あいつは俺を、俺たちを、殺すつもりだ。

「おい士郎！ 武器だツ!! なんか武器はねーのかよ!!」

隣にいるオレンジ色の奴が、声を荒げる。武器だつて？ そんなもの……と、手に何かサリという感触を感じた。これは、スーパールのレジ袋か。中には、大根と豚肉、それと……いや、他はどうでもいい。俺は大根を手に取り、強化の魔術を施す。上手くいってくれ……。

「同調開トレス」オ「そいつは魔剣大根ブレードじゃねえか!! 貸せツ!!」

強化しようとした大根を取られる。おいそれただの大根だぞ!!

「こんな所にこれ程の名剣があるとはなア……天の助ツ、お前の剣借りるぜ!! うおおおおおお!!」

オレンジ色の奴が良く分からない事を言った後、何の変哲もないただの大根を持って

男に襲い掛かった。

大根を大上段に構え、男に振り下ろそうとした刹那、一閃。

「あつ」

大根は男の薙ぎ払いで綺麗に両断された。

男はそのまま流れるようにオレンジ色の奴を貫いた。

「グハツ」

男が槍を引き抜くと、そいつは吐血してその場で倒れた。

「……………」

「……………」

ええええ……何がしたかったんだろう、アイツ。

オレンジ色の奴は、そのまま起き上がり、てくてくと俺の所まで歩いて来ると、泣き

ながらこう言った。

「負けちゃった……」

「いや当たり前だよ」

何故大根で勝てると思ったのか。

後何サラツと復活してるんだよ……傷とかも無いし。

まあ、コイツなそういうものなのだ、何故か妙に納得している俺がいる。

けど、男にとつてはそうどうでもいい事ではないらしく、槍を構えたままその場に留まり、こちらの様子を警戒している。

「……何者だ、てめえ」

男が感情のこもっていない声でそう尋ねる。しかし全身から発せられる極大の殺意は隠しきれていない。

「オレの名は首領パッチ」

「なっ——真名をばらしやがった……ハッ、単なるバカなのか、それともくだらねえ嘘をついているだけなのか……まあいい。首領パッチなんて英霊は知らねえし聞いたこともねえ。その名が嘘であれ真であれ、正体もクラスも判らない事に変わりはねえな……。オレはまあ、見ての通り、^{ランサー}「ランサー」だ」

聞きなれない単語を口にする青い男。槍兵か。^{ランサー}確かに見たまんまだが、戦国時代じゃあるまいし、なんでこいつが俺を殺そうとしているのか増々分からない。

そして、この謎の生命体(?)の名前がやっと分かった。首領パッチか。何だろう、すぐくしつくりくる名前だ。そんな事を思いながら、首領パッチの方を見ると、何故か腹を抱えて笑っていた。

「ギャハハハ!! おい士郎、ランサー^らだつてよ!! 全身ピチピチもつこり蒼タイツだし、コイツ絶対ガチホモだぜ!! 必殺技名には多分『ゲイ』つてついてるぜ!! 太くて

硬い槍♂を相手のケツにぶち込むことで相手のハートをゲットしてきたんだらうぜ W
W W

「おい、性的マイノリティに対する差別的発言は——」

——ってなんで俺こんな事言ってるんだ？ いや突っ込むべき所はそこじゃない
だろう。

ランサーとかいう男の方をチラツツと見ると、ああ、かなり怒ってらっしやる……眉間に皺を寄せ過ぎて、右眉と左眉が連結しそうだ。

「——成程。あの糞神父が言ってたのは、お前だな」

ランサーが、口を開く。

瞬間、空気が凍り付く。

「あいつは俺に、一つだけ令呪を使った命令を出しやがった」

男が、ゆっくりと構え方を変える。

「異常事態を、消せってな」
イレギュラー

男が動きを止めた。

瞬間、堰を切ったように、男から膨大な魔力と、殺気が放たれる。

空気が歪む。大地が震える。

何なんだあの魔力量、人間が出していい量じゃない。

本能が訴えかけている。お前はもう死ぬと。助からないと。

アレは、人のカタチをした天災だ。人類が太刀打ちできるものじゃない。

「くそつ、首領。パッチソードさえあれば……おい士郎!! 何か武器はねーのか!!」

首領。パッチの声で我に返る。まだまだ、まだ衛宮士郎は死ぬわけにはいかない。武器になりそうな物を探して、辺りを見回す。

あつた。さつきランサーに弾き落されたネギが。あれは既に強化をしてある。あれを取りに行ければ……けど、かなり距離がある。

くそつ、間に合うか——

「その心臓貫い受ける」

死神から、無慈悲な死刑宣告が下される。

槍兵の纏う膨大な魔力が、その鮮血の如く紅き槍に収束していく。

放たれる前から理解してしまう。あの一撃から逃れられる者など存在しない。狙った獲物は過たず穿たれる、文字通りの必殺。

「……は俺に任せて行け!!」

首領。パッチが叫ぶ。

「でもー」

「このセリフ一度言ってみたかった……」

首領パッチが頬を染める。

「言ってる場合かよ!! ああチクシヨウツ!」

槍兵に背を向け、ガムシヤラに走る。

「刺し穿つ——」

ネギを何とか拾う。その瞬間、轟、と槍が唸る。

見ると、ランサーは首領パッチとの距離を詰めていなかった。

あの距離から? 一体何を——

「——死棘ポルルの槍——!」

ランサーは、膨大な魔力を込めた槍を首領パッチに向かって突き出した——

——突き出した。

……突き出した。

……突き出した。

……うん。当たり前なのだが、距離が開いているので、突き出しても刺さらない。

投げる訳でもなく、先端からビームが出る訳でもなく、ただ槍から魔力を放出させ、大

気へと返した。それだけだった。

マジであの距離から一体何をしたかったのだろう……。

ランサーが驚きと戸惑いに満ちた目で首領パッチを凝視する。

「……テメエ、まさか心臓が無いのか!？」

は？ 心臓が無い？

もし、今の技が、『狙った相手の心臓を必ず穿つ』というもののだとしたら、成程。相手が心臓を持っていなければそもそも発動しない訳だ。

……コイツ何なの？ 虫か何かなの？

当の本人は呑気に笑ってるけど、下手したら、というか十中八九死んでもおかしくなかつた状況だぞ……。

「イヒヒヒヒ!! ゲイ♂のボルクだつてよ!! 予想的中だぜつ!! しかもかつこよくポーズ決めてキメ台詞までつ、ギャハハハ!! ただの痛い奴じゃん!! はあくずかしい」
うわあ……やめて差し上げて……ランサーはもう顔を真っ赤にしていた。

「つてうおい! 士郎、それ首領パッチソードじゃねえか!! 超越セツ!」

ほぼ反射的に首領パッチの言葉に反応し、強化したネギを投げて渡す。

「……首領パッチソード? あと今思ったんだけど、それ、強化しているとはいえ、只のネギだぞ? さっきの二の舞になる気が」

「大丈夫だつて! 余裕余裕♪」

首領。パッチはそう言つて、ネギでゴルフの素振りを始めた。

月光の下、全身青タイトの紅槍を持った男とオレンジ色の謎の生命体が我が家の庭で相対しているのは、傍から見れば中々シユールな光景である。

月を、雲が覆い隠す。

両者の姿が、影に吞まれる。

瞬間、両者が互いに向かつて疾駆した。

「シッ——!!」

「オラァァァ!!!」

両者の武器が、激突する。

耳を貫くような爆音とともに、火花が飛び散る。

武器と武器との衝突は、一度や二度では止まらない。

三度、四度、五度、両者の剣戟は、最早目で追いきれない程に加速していく。

空気が爆発したと、そう錯覚させるような、凄まじい連撃の応酬。

両者の攻撃が余りにも早すぎて、まるで無数のネギと槍が交錯しているかのようだ。

男の攻撃は、苛烈そのものだ。しかし絶え間なく繰り出される数多の技は、どこか優

美さを感じさせる。

まるで蒼き龍が、真紅の長布を身に纏い、闇夜に舞っているかのようだ。

素人の俺にすらそう感じさせる、圧倒的なまでの技量。あれは天賦の才だけでも、極限の努力だけでもたどり着けない。その双方で頂点に立たねば、あの域には至れないだろう。

対する首領パッチは、なんだろう、ものすごくはやく、矢鱈目つたらネギで叩いてるだけに見える。

いや、実際そうなのだろう。技もクソもない。例えるなら、スーパールのオモチャコーナードで欲しいものを買って貰えず駄々をこねてる幼稚園児、みたいな。

極限まで磨き抜かれ、最早神域にまで至ろうとする程の者が最高峰の武器を用いているのだ。スーパードで買ったネギでテキストに叩いてる首領パッチが勝てる訳が――

壮絶な打ち合いの末、攻撃を弾かれ、大きく体勢を崩したのは、ランサーだった。

「何ッ!!」

「おらよっ!!」

男のガラ空きになった鳩尾に強烈な前蹴りを喰らわせる。

「ぐばっ!」

吐血しながら、一瞬くの字になった男の脳天に上から拳骨を叩き込む。

男は頭から地面に突っ込み、そのまま動かなくなつた。

「……へ？」

頭が地面に埋まり、うつぶせのままピクリとも動かない槍兵の体を踏みつけながら、首領。パッチはネギを高らかに上げ、

「わーい、勝ったー」

勝利を宣言したのでった。

終わった、のか？ 安堵したと同時に、気を張っていた全身から力が抜け、その場へあたり込んでしまった。

「良かった……一体、あの男は——」

その時、どこからか視線を感じた。なんとなく、家の屋根を見る。しかし、そこには誰もいなかった。……気のせいかな。

「ん？ おいてめえ、オレの体に何書きやがグハッ」

突如、首領。パッチが血を吐いて倒れた。と同時に、地面から爆炎が巻き起こる。

「……まだだ……まだ終われねえ……」

よろめきながら、ランサーが身を起こす。

魔力で自らの体に文字を書くランサー。柔らかな光が全身を包み込み、男の口と頭か

ら流れ出る血が止まる。あれは、治癒魔術か——？

首領。パッチが、幽霊となって俺の下へやって来る。

「おらーは死んじまっただー♪」

「いやピンピンしてるじゃん……」

何今の流れ。そもそもなんで吐血したんだよ。

「死のルーンも効かねえか……まあいいさ。どの道マスターを殺せば、それで終わりだ」
ルーン、マスター、耳慣れない単語を口にするランサー。だが、それが何なのか考える暇なんてない。さつきまでとは比較にならない程の、膨大という言葉でさえ足りない量の魔力が、ランサーの槍に集まっていく。

何だ。いったい何をするつもりだ。

やばいやばいやばい。

「首領。パッチ!! ちょ、やばいって!!」

オレンジ色の体を揺さぶる。しかし首領パッチは悟りきった顔のまま、穏やかな態度を崩さない。

「人はいつか死ぬものです」

アルカイツクなスマイルを浮かべる首領パッチ。

「そんな事言ってる場合かよおおお!!」

……ランサーが、地に伏せるような構えを取った。同時にあの凄まじい量の魔力が、全く漏れ出る事無く、彼が携える真紅の魔槍に収束されていく。

一瞬、静寂が訪れる。冷たい風が、俺の頬を撫で、槍兵の髪を揺らす。

「この一撃、手向けとして受け取るがいい」

呼吸さえ困難な程に凍り付いた空気の中、槍が静かに唸りを上げる。全てを破壊してやると、そう言わんばかりの魔槍の猛り。直感した。あれが放たれば、俺という存在が塵一つ残さず消滅する。

地を踏みしめた足は、地面を割り、尚も深く沈んで行く。上半身は極限まで撓められ、逆手に握られた槍が軋みを上げる。紅の魔槍が、今まさに解放されようとしていた。

「——行くぞ」

槍兵が跳躍する。

空が震える。あの槍に、世界そのものが怯えているのか。

「『突き穿つ』」

すまない、親父。アンタの願いは——

「はあああああ!!」

その瞬間、闇夜に銀の彗星が奔った。

「チッ！」

突然の襲撃により、攻撃を中断するランサー。空中で、謎の敵を迎撃する。

地面に降り立つと同時に、再び跳躍して屋根の上にあがる。

「流石にサーヴァント二人を相手にするのは無理だな……首領パッチ、てめえだけは絶対に殺す」

そう吐き捨てた後、ランサーの体は光の粒子となつて、夜の空に溶けていった。

助かった、のか？ 今度こそ本当に。

「ご無事ですか」

鈴のような、少女の声。

月光に照らされる白銀の甲冑。

柔らかな金の髪に、西洋人形のような精緻に整った顔立ち。

凜々しく澄み渡った翡翠の瞳が、真っ直ぐにこちらを見つめている。

「え、あ、その、平気、です」

その姿が余りにも現実離れすぎて、しどろもどろな受け答えをしてしまう。

「それは良かった。しかし、ランサーは何故、この無力な少年に対して自らの宝具を――

「!?」

少女の目に、驚愕の色が浮かんだ。視線の先には、

「プルコギ、プルコギ」

プルプルと震えながら、両手を狐の形にして、謎の動きを繰り返している首領。パツチの姿があつた。

2. 遠坂凜の首領パッチに対する考察

聖杯戦争。

マスターと呼ばれる七人の魔術師が、人智を超えた使い魔『サーヴァント』と共に、最後の一人になるまで殺し合い、生き残った者には万能の願望器である『聖杯』が与えられる。

俺はその戦争の参加者の一人になったのだという。居間でお茶をすすりながら、スラスラと話す遠坂。

「——って事。分かった？」

「……は？ いや、なんだよそれ。そんな荒唐無稽な話、いきなり教えられても……」
「まあ、そうすぐには信じられないわよね……けど、貴方はもう巻き込まれてるの。その手に宿る令呪と、そこに居る謎の生物が何よりの証拠だわ」

そう言って、首領パッチを指さす遠坂。

首領パッチはシューズとチョークバック、ハーネスにロープを装備して、何故かロツククライミングを始めようとしていた。

「……何やってんだよ」

「あそこに聳えるほぼ垂直の断崖絶壁を登ろうとしているのであります！」

そう言つて、セイバーと呼ばれる小柄な少女を指さす。彼女は今、銀の鎧を外し、紺色のドレス姿で正座している。

「？ セイバーがどうかしたのか？」

「見事なまでの断崖絶壁であります！」

セイバーの額に青筋が走る。

……いや、確かにそれ程胸がある訳ではないけどさ……。

セイバーと目が合う。その宝石のような瞳には、未だに警戒の色が見て取れる。

ああ、首領。パッチが変な事をするから……。

遠坂は、あの女の子を使い魔サーヴァントと呼んだ。

サーヴァントとは、死亡した英雄——人間を超え、精霊の域に達した超人たちや神霊などを引つ張つてきて、聖杯の力によつて実体化させた存在なのだという。

その話が本当なら、あの少女も英雄だった人間なのだろうか？

そして何より——

「やっ」

遠坂が静かに口を開く。

「衛宮君への説明はこの辺りにするとして。今度は貴方に質問するわ、首領パッチ……」
「ぶべらっ！」

チヨークの付いた手でセイバーに触れようとした首領パッチが、強烈なパンチをお見舞いされ、ガラスを突き破って窓の外へ飛び出していった。

「ハッ！……申し訳ありません、凜」

しゅんとするセイバー。まあ、流石にあれだけ煽られたらキレルよな……。

溜息を吐く遠坂。

「衛宮君、アレ拾ってきて」

大人しく遠坂の言葉に従い、庭に横たわっている首領パッチを拾って、遠坂の前に置く。

「改めて聞いわ。貴方——一体何なの。」

サーヴァントは英雄である以上、歴史上に弱点や能力といった情報を残している。故に、サーヴァントの正体は秘匿しなければならない。

そう言ったその口で、遠坂は首領パッチに問いかけた。

お前は何者か、と。

「遠坂、お前さつき」

「違うわ。わたしが聞いているのは、そんな単純な事じゃない。——貴方、本当にサーヴァントなの？」

え？

おかしい。遠坂の説明だと、コイツは俺が召喚したというサーヴァントの筈だ。

あの土蔵で突然現れた事、ランサーのサーヴァントから何やかんやで俺を助けてくれた事……そして、コイツは明らかに人という枠に収まらない存在だ。あの動きは、人間など優に超越していた。

というかそもそもどう見たって人間じゃない。きつと妖精か何かの一種なのだろう。にも関わらず、奇妙な質問をする遠坂。そこに重大な意味が隠されているような気がして——気が付けば、勝手に鳥肌が立っていた。

「遠坂。それ、どういう意味だ」

「言葉通りの意味よ。衛宮君、サーヴァントについての説明は聞いてたでしょう？ けれど、コイツにはさつき言った事のほとんどが当てはまらないのよ」

「……は？」

思わず間抜けな返事をしてしまう。

「……まず、サーヴァントというものは膨大な魔力の塊みたいなものなの。だけど、コイ

「ツからはそれを全然感じられない。衛宮君も分からないでしょ？」

「確かに……」

「つまり、コイツには魔力が全く無い。サーヴァント召喚システムそのものが大掛かりな魔術なのに、その結果出てきたものに魔力が一切ないのは『異常』よ。……かろうじて召喚時に聖杯から漏れ出た魔力の残滓は確認できるけど……」

確かに、サーヴァントの現界にはマスターからの魔力供給が必要だと遠坂は言っていたが、俺は今、それを全くコイツに供給していない。何かを吸われ続けているような気がするけど……。

「次に、サーヴァントとなるのは歴史に名を刻んだ英雄か、もしくは神話に出てくるような怪物の類よ。時には神霊すらも呼ばれる事があるわ。けど……」

「ちら、とセイバーに視線を向ける遠坂。」

「セイバーが、促されるままに言葉を紡ぐ。」

「私は聖杯から、現世の知識と、ありとあらゆる英雄や怪物、神霊の情報を与えられています。しかし、このような怪物も、首領パッチという名の英雄も知らない。」

「苦虫を噛み潰したような顔をするセイバー。」

「本来サーヴァントの召喚には、その英雄に関係のある『聖遺物』を触媒として使うの」「魔法少女、カレイドンパッチ！　ここに爆誕☆」

首領。パッチがまたセイバーに何かちよつかいを掛けているが、遠坂は無視して話を続ける。

「もし何も使わず召喚した場合、呼び出したマスターの性質に近い者が選ばれるわ。……一体何を触媒にしたらあんな奇怪奇天烈なものを呼び出せるのよ……。それとも、衛宮君つてホントはあんな感じの人間なの？」

遠坂が冷たい視線を俺に向ける。

「ゴ、誤解だ！ きつと何かが偶然触媒になったんだ！」

後ろから爆発音が聞こえた。

「さっきから何やってんだよ！」

首領。パッチのいる方を見……。いや、怖いから見たくない……。

「それで、貴方は何者なの？ もし教えてくれたら、代わりにセイバーの真名も……」

「凜」

セイバーが厳しい声で諫める。

「……ゴメン。そうね……。ランサーの情報もオマケで教えてくれる？ それでいいでしょ、セイバー」

遠坂がおねだりするようにそう言うと、セイバーは渋々了承した。もしかしたら令呪まで使われかねないと思ったのだろうか。小さい声で「これだから魔術師は……」とか

何とか言ってたけど。

知的好奇心の赴くままに真実をとことん探求するのが『魔術師』というものだとかヤジは言っていた。遠坂も一角の魔術師、という事なのだろう。

首領パッチが漆黒の槍を構え、高らかに叫ぶ。

「我が名は竜騎士ガルザーク！」

「嘘つけ」

誰だよそのRPGとかによくいそうな奴。

「じゃあ衛宮士郎みたいなもの」

「俺!! じゃあって何だよじゃあって!」

「めんどくせーなあ。ロリコンでいりや」

「ロリコン幼児性愛者!! ிரியって何だよ!」

駄目だ。まともな会話が成立しない。コイツは多分「バーサーカー」なんだろう。

「……はあ。もういいわ。取り敢えず、聖杯戦争について教えてあげたんだから、ラン

サーの情報だけでも教えなさいよ」

「わかった。……なんか、ゴメン」

情報、と言っても大したものはないのだが。取り敢えず、ランサーと首領パッチが戦った時の事を話した。

「令呪のブーストがかかった状態のアイツと打ち合って勝った!! そんな、セイバーと」

「凜」

「またもセイバーから厳しい視線を向けられ、きまり悪そうにする遠坂。しかし、今の言葉にそこまで責められるべき要素は無かったと思うけど。」

「ゴホン、ランサーはセイバーに少しは食らいついて見せた、割と強い方のサーヴァントだったわ。貴方のサーヴァントは、まあ、そこそこ強いんじゃない？ 良かったわね」

「そこそこ、か。傍から見ただけではランサーは凄まじい、それこそ聖杯戦争で一、二を争うレベルのサーヴァントだと思ったのだけど、セイバーはそれ以上なのか……。」

「他には？ 宝具とか使って来なかったの？」

「宝具、か。そういえば、ゲイボルクとか何とか言ってたような。首領パツチには心臓が無い、とも……。」

「それを遠坂たちに伝えると、二人とも一気に表情が暗くなった。」

「ゲイボルク。ランサーは、アイルランドの光の御子ですか」

「？ 誰なの、それ」

「クー・フリーリン。日本では余り知名度が高くありませんが、ケルト神話最大最強の英雄

として、北欧の方ではかなり有名な英雄です。そして……」

「……狙った相手の心臓を必ず穿つ、か。発動させてはいけない類の宝具ね。あの男、一体どれだけ……」

眉間に皺を寄せ、下唇を噛む遠坂。

ランサーに、何か悔しい事でもされたのだろうか。

「セイバーとの戦いでは使われなかったのか？」

俺の問いかけに、一瞬硬直する遠坂。二秒ほど考えた後、

「え、ええ。ランサーは宝具を発動する暇さえなかったわ」

と、そう答えた。

「遠坂、何か俺に隠してるだろ」

「真実はいつも二つ！」

首領パッチが便乗してきた。その赤い蝶ネクタイとメガネどっから持って来たんだよ……。

あと真実がふたつあるのだとしたら、それはまだ事件を解決し切れていないだけだろ。

「……き、気のせいじゃ」

「話は終わりましたね、凜。では簡単に同盟でも結んで早々に帰りましょう。」

遠坂との間に無理矢理割って入られる。やっぱり何隠してるな。

「いや、ええと、その前に、コイツを教会に連れて行かないと。衛宮君がこの後どうするつもりなのかは知らないけど、何をするにせよ取り敢えず、この戦いの監督者にマスター登録をしてもらう必要があるのよ」

「……分かりました」

「じゃ、行きましようか。行き先は、隣町の言峰教会。そこがこの戦いを監督している、エセ神父の居所よ」

深夜の町を歩く。

既に日付は変わり、時刻は午前一時。

人どころか鳥や犬すら見当たらない、寝静まった夜の街。こんな時間に起きている人は稀だろう。

「士郎、見てみるよ！ 犬のウンコがあるぞ！」

だからこんな時間にアホな事を大声で叫ぶなよ……迷惑千万だ。

首領。パッチの指さす方を見る。

……蛇みたいにとぐろを巻いたピンク色のウンコって現実に存在するんだな。

首領パッチがどこからか持って来た木の枝をソレに突き刺して持ち上げる。

「うわっ、汚いからやめろよ……」

「キーーーーーン」

首領パッチはそれを持ったまま、奇声を上げながら何処かへと走り去っていった。

「……………」

後ろを歩く二人に目を向ける。

セイバーは、顔をしかめすぎて最早別人と化していた。今にも襲いかかつて来そうな剣幕である。

遠坂は、呆れなど通り越して、最早憐憫の目を俺に向けるまでに至っていた。

「スマン……」

何故俺が謝らなければならないのか。

どうして俺が気苦労を抱えなければならないのか。

考えるのもバカらしくなった。

「まあ、取り敢えず貴方だけでも言峰の所へ連れて行く。……そこで、マスター権を捨てる事をお勧めするわ。それでいつも通りの日常へ帰れる」

「ああ。……色々とありがとう、遠坂」

そんなこんなで、奇妙な三人組は、言峰教会へと歩を進めたのだった。

3. 首領パッチ、言峰教会へ行く

礼拝堂の内部は、惨憺極まる有様であつた。

人々が座っていたであろう長椅子は、一つ残らず粉碎され、破片が散乱していた。

荘厳な音色を奏でていたであろう巨大なパイプオルガンは、何をどう頑張つたらそうなるのかは知らないが、巨大ロボットに変形していた。多分もう二度と元には戻れないだろう。

信者たちが祈りをささげていたであろうキリスト像の頭は、カツオの頭に挿げ替えられていた。

中央に控える祭壇には男の人がパンツ一丁で横たわっており、股間の部分にはカツオの頭が、上半身にはカツオの切り身が載せられていた。よく見るとご丁寧に大根おろしとポン酢まで掛けられている。

そのそばで首領パッチが、カツオをかたどつた杖(?)を持って一心不乱に祈りを捧げていた。

「カツオ神様のく復活をくカツオ神様のく復カツオく」

「何やってんだ首領パッチイイイイイイイ!!」

思いっ切り首領。パッチを殴り飛ばす。

「カツおべらっ！」

首領。パッチのおもちゃにされてた男性に駆け寄る。

「大丈夫ですか?！」

「愉悦……何という愉悦……」

その人は物凄く綺麗な笑顔を浮かべながら、良く分からない事を呟いていた。

「……綺礼」

遠坂がボソツと呟く。

この人が聖杯戦争監督者かよっ! どうしよう、もし俺が監督者でこんな事をされたなら、間違いなくやった奴を処罰する……聖杯戦争ってなんか物騒だし、タダじゃ済まないぞコレ……。

「凜か。呼び出しに応じぬかと思えば、今更やって来るとはな」

その男性——言峰がゆっくりと身を起こし、載せられていた刺身がボタボタと床に落ちる。勿体ないな……いやそれ以前にどっから持って来たんだよ。

「こ、言峰、何やってたの……?」

「見て分かる通り、おやびんによるカツオ神様復活の儀を手伝って差し上げているのだ」
いや、見ても分かんねえよ。後なんで首領。パッチを親分などと呼んでいるんだ……?」

「それで、何の用だ？ 凜」

「え？ あ、こいつ、最後のマスターなんだけど……」

遠坂がそう言うのと、言峰という神父はゆっくりと俺に視線を向けた。その目に対して、強い嫌悪感と、何処か親しみ深さを感じた。

どこまでも明るい、希望に満ち溢れた双眸。

気持ち悪いほど爛々と輝くその目は、どことなく首領パッチと似ているように思えた。

直感する。この人は首領パッチのせいで、何か取り返しつかない状態になっているのだと。

「ほう、君がおやびんを召喚してくれたのか。礼を言うぞ。私もおやびんが現世に生を受けられるよう、出来る事は全てやるつもりだ。そうだな、手始めにまず私の持つ予備令呪をすべて君に譲渡」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ！ 何言つちやつてるのよ綺礼！ アンタそれでも監督者なの？」

「ああ、私は監督者だ。それはつまり、教会にバレなければ何をしようが許されるという事だ。凜、お前も無条件失格にされたくないかつたら大人しくこの少年の手伝いをするのだな。どうせお前がこの戦争に参加した理由など、『そこに戦いがあるからよ』とか何と

かいうちよつと格好つけた痛々しくどうでもいいものなのだろう?」

鷹揚に両手を広げ、天を仰ぎながらそんな事を口走る言峰。

うわ、最低だこの人……。

遠坂は、どうやら凶星だったらしく、顔を真っ赤にしていた。

「ア、アンタ碌な死に方しないわよ!」

負け惜しみのように喚き散らす遠坂。

「おやびんの為に死ねるのなら本望だ」

勝ち誇ったように堂々とそう言う言峰。

「つ……それじゃあ、今日の本題。コイツ、マスターを辞めたらしいんだけど、いい

かしら?」

「そうか。では私が代わりにマスターになるとしよう」

「は?」

「辞め方は簡単だ。どうでもいい命令に令呪を三画使えばいい」

思いの外アツサリとマスター権放棄を承諾してくれた。

「どうすれば、使えるんですか?」

「令呪とおやびんに意識を集中させる。そうだな、その後『その場でジャンプしろ』と三

回口に出せばいい」

「はあ」

取り敢えず、言われた通りにやってみる。

成程、令呪が光りだした。

首領。パッチにも意識を向ける。

「おお！ カツオ神が復活した！」

首領。パッチは意味不明な事を口走りながら、スケボーを乗りこなしているカツオにポ
ン酔をぶっかけていた。

……うん、もう深く考えない方がいいなこれ。まともに受け止めたら、隣で完全に静
止している遠坂みたいになってしまう。

「その場でジャンプしろ」

………あれ？ 首領。パッチは反応しない。

もう一回やってみたが、やはり何も起きない。

最後の二画まで使い切ったが、やはり何も起きない。

「言峰、さん、あの、何も起きないんですけど……」

言峰は、しばらく沈黙した後、左手を首領。パッチの方に差し出し、ゆっくりと口を開
いた。

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従う

ならば応えよ」

何か呪文のようなものを呟いたが、やはり何も起きない。

「……………どうやら、未だおやびんはお前のサーヴァントのようだ。先の令呪は恐らく、おやびんを縛るものでは無かったのであろう」

柔らかな微笑を崩すことなく、そう告げる言峰。

「……………はっ」

首領パッチを縛るものではない？ どういう事だ？

「要するに、お前は聖杯戦争を降りることが出来ないという事だ」

「え……………そ、そんな……………」

最悪だ。魔術師や人外のバケモノ達による戦争。そんなものに無理矢理巻き込まれて、その上逃げる事さえ許されないってのか……………？

俺は死ぬだろう。近いうちに、間違いない。唯一の希望である筈のサーヴァントはアレだし、俺自身の力量も全然無い。もう本当に、どうしようも無い。

「まあ、そんな顔をするな。勝てばどんな望みでも叶うのだぞ？ そんな機会に巡り会える幸運な人間など、世界中を見渡してもそうはいまい。無論、私も可能な限り支援をしよう。勝ちの目は十分にある。悲観することはない」

そう、優しく告げる言峰。

悲観する事は無いと言われても、今日突然殺し合いに強制参加させられる羽目になったのだ。悲観しない方が難しい。

けど、勝てばどんな望みでも叶う——

「望み、か」

正義の味方になる事。

昔は親父の夢で、

今では俺の理想だ。

ふと目を閉じれば、あの炎の夜が浮かび上がる。

あの地獄で死んだ人達が、責めるように俺をみつめている。

彼らは何も言えない。喉が焼けているからだ。

彼らは何も視えない。両目が灰になったからだ。

彼らは何も聞こえない。全てを燃やす業火の音が、助けを求める声も、悲痛な叫び声も、全ての音をかき消してしまおうからだ。

俺は、あの日死んでいった全ての人の為に——

「絶望を塗り替える、正義の味方になりたい。それが俺の……」

——いや、その夢は、俺自身が成すべき事だ。聖杯に頼ったって仕方がない。

そうだ。俺は聖杯なんて、欲しくはない。

「フツ、まあいい。正義の味方、と来たか。であれば、取り敢えずは、悪党の手に聖杯が渡る事を阻止する為に戦えばよろう」

……そうだ。もし聖杯なんてものが実在して、悪い奴が世界征服なんか利用したら……。

俺は、それを止めるために戦う。

首領パツチの方を見る。パソコンで何かのゲームをやっていた。

「士郎！ この月姫っつーゲームクソおもしれえぞ！ 一緒にやろうぜ！」
止めるために戦えるのかなコレ……。

「……凜、この少年を拾ってきたのはお前だ。その責任を持つとは思わないのか？」
遠坂が、言峰に呼ばれて我に返る。

「え？ 責任？ ……まあいいわよ。取り敢えず同盟は結んであげるつもりだったし」
「そうか。今ここに契約は完了した。『遠坂家は衛宮士郎がしたことに対して責任を持つ』とな。録音もしておいたぞ」

そう言つて、パンツからズルつと録音機を取り出す言峰。

……うへあ、臭そう……。

「では手始めに、この教会の修繕費を弁償してもらおうか。おやびんの儀式も終わった

ようだしな」

「は？」

目が点になる遠坂。

「そ、そんな事、魔術で何とか……」

「存分に試してみると良い。しかし窓ガラスのように小さい物ならともかく、これ程の規模の破壊となると、お得意の寶石魔術を使うしかないだろう。寶石にかかる金と修繕費、どちらが高くつくものか……」

「え、衛宮君に対して責任を持つとは言ったけど、こんな事まで」

「ほお、遠坂家は一度宣誓したことを簡単に無かったことにするのか。よく分かった。これは魔術協会と聖堂教会に於いて周知の事実とする必要があるな。証拠もしっかりとある」

録音機をこれ見よがしに遠坂の目の前でブラブラさせる言峰。

「ああああああもう！ 分かったわよ！ 払えばいいんでしょ払えば！ 地獄に落ちろ糞神父！」

「ククク、愉悦」

顔どころか首まで真っ赤にして怒り狂う遠坂。

対照的にとても嬉しそうに笑う言峰。

コイツやつぱり首領。パツチに汚染されてるな……。

後で遠坂には払えるだけ払っておこう。我が家の家計はそこまで裕福じゃないんだけど……藤ねえに借りるしかないか……。

「ギャハハハ!! リアル『遠坂家ノ家計事情』だ!! ちよつと種付けおじさん呼んで来
ぜ!!」

……マジでコイツを質に入れてやろうか。

「さて、他に何か用はあるのかね? 少年」

何か用……別に何も無い筈だけど……いや、一つ、一応聞いておきたい事があった。

「その、言峰神父はなぜ、俺と首領パツチにそこまで協力してくれるんですか?」

「ふむ」

男は少し、沈黙する。

「……一つ、訂正しておこう。私は、おやびんに命を捧げると誓った。故に、私は最早神に仕える身ではない。神父、とは呼んでくれるな」

驚くべきことに、申し訳ない事に、言峰綺礼という男は首領パツチのせいで自らの信仰を捨ててしまったのだという。

男は独り言のように、俺ではなく自分自身に語りかけるように、滔々と自らの心の裡を言葉にし始めた。

「いや、まさかこんな所で、長年追い求めていた『答えの答え』が見つかるとはな」

「いったい何が可笑しいのか。男は堪え切れぬとばかりに喉から笑い声を零しながら、右手を天に伸ばす。」

「そう、私が求めていたのは、『混沌』だったのだ。意味不明なもの、不条理、不合理こそ、私が無意識に求め続けている物だった……」

神を捨てた神父の独白は続く。

「前回の聖杯戦争において、長年教えを乞うた師匠をいきなり後ろから突き刺してみたり、雁夜とかいう男を使ってリアル火曜サスペンス劇場を開いて、それをギルガメツシユに見せびらかしてみたり、何の脈絡もなく辺り一帯を炎の海にする事を願ったり……成程、そんなものを好み、秩序や倫理、道徳などには嫌悪感を抱く……聖職者など、向いているはずもなかった」

何を言っているのか、俺にはさっぱり分からない。けど今サラツととんでもない事を口にしてなかったか……？

「あ、アンタ、十年前の聖杯戦争に……？」

しかし、男は答えない。

遠坂の方を向くと、彼女は無言で首肯した。……物凄いい気になるけど、とても嬉しそうに語り続ける言峰を邪魔するのも悪いと思い、言葉を飲み込む。

「十年前。私は自らの答えを見極め、そして、その在り方を良しとした。しかし……それは、答えであって答えでは無かった。方程式の解だけを渡されても、そこに至る過程が無くば、到底納得出来るものではない。ならば、今度こそ答えを。その為に、この世全ての悪の誕生を。」

そう、私は思っていた。おやびんに会うまでは。

私の教会が無惨な姿になっていく様を、おやびんの意味不明さを、混沌の権化そのものの姿を見て、わたしは悟った。自分は、混沌に連なるものなのだ。人が美しいと思う物を美しいと感じる事が出来ないことも、他者の不幸に愉悦を感じることも、全て、それが理由なのだ」と

言峰はふと、無敵要塞ザイガスと化した首領パッチの方に目を向けた。

「これが、無敵要塞ザイガスか……」

名も無き兵士が、また一人倒れる。

……無敵要塞ザイガスって何？

「答えは得た。私は、満足してこの生を終えられる。ならば私に残された唯一の使命は、どんな犠牲を払ってでも、おやびんという存在をこの世界に残す事だ」

くつくつと愉快そうな笑い声を囁み殺しながら、男は自らの人生を変えたモノへ静かに祈りを捧げた。

何だろう、彼は物凄い勘違いをしている気がする。明確にどこがどう違うのかまでは指摘出来ないけど。多分、その間違いに気付かない位、首領パッチという存在が彼にとって衝撃的だったのだろう。

「——さて、では行くがいい少年、衛宮と言ったか。令呪を譲ろうとも無駄になる故、こんな物しか渡せぬが」

言峰はそう言つて、黒い僧衣の様な物を渡してきた。何か微妙に生暖かいし、ポン酔でビショビショなんだけど……。

「私が着ていた服だ。防弾加工、及び呪的防護処理を施してある。喜べ少年。これでキミも聖堂教会代行者の仲間入りだ」

「いりません」

何が嫌でオッサンが着ていたポン酔まみれの服を貰わなければならないのか。

「私は白鳥よ！ スワンなのよ！」

そう叫びながら、首領パッチは窓ガラスを突き破つて飛び去つて行った。

……はあ。なんだろう、いい加減アイツという存在に慣れてきた。

「帰ろうか、遠坂」

「……そうね」

ふう、と溜息をついて、言峰に背を向ける。短い時間だったけど、すごい疲れた……。

言峰は、

「おやびん、何という美しい去り様……」

意味不明な事を呟いて惚けている。

神父の醸し出す気持ち悪い空気から逃れようと、足を速める。

教会の扉を潜り、外界に足を踏み出す。もう、この場所に用はない。後はただ、夜の

街を歩き、我が家を目指すだけだ。

——その、瞬間。

「——喜べ少年。お前の求める答えは、すぐ傍にある」

そう、祝うように神父は告げた。

4. 狂戦士

教会の外へ出ると、セイバーが首領パッチに絡まれていた。

「きいいいい！ この泥棒猫！ アナタがヤツくんを誑かしたのね！ 最近妙に冷たいと思つたら……アナタ！ どうなのよ！」

そう言つて気持ち悪い人形を振り回しながら、セイバーに詰め寄る。

最近その人形が冷たいのは、今が真冬だからだろ。

セイバーは今にも斬りかかりそうな形相だったが、何とか堪えて無視を決め込んでいる。

「ヤツくんも何か言つてよ！ ねえ！ ねえ！ 何か言つたらどうなのよ！」

そう言いながら、人形の体を掴んで頭を激しく揺らす。

「ねえ！ ねえ！ ねえ！」

揺らすスピードはどんどん早くなり、そして――

バキッ

「あっ！」

人形の首がもげた。

「ジョニーイイイイイイイイイイイイイイイイ!!」

首領。パッチが悲痛な叫びを上げた。

そのまま人形を高らかに持ち上げる。

「はっ! ジョニーが飛んだ!!」

首領。パッチは人形を高らかに持ち上げたまま、街の方へ走り去って行った。

「ジョニーが飛んだああああああああ!!」

「……………」

「……………」

「……………」

しばらく三人で呆然とその場に佇んでいると、道の先の方で首領。パッチのものである断末魔の叫び声が聞こえた。

「ギイヤアアアアアアアアアア!!」

……はあ。もう何なんだろう、アイツ。こんなサーヴァントで、一体どうしろというのだろうか。

遠坂が、少し溜息を吐き出し、目を閉じて何かを考えるような仕草をした後、

「衛宮君」

冷たい口調で俺の名を呼んだ。

「貴方、これからどうするつもりなの?」

どうするつもり、と言われましても。あの神父の言う通り、悪い奴を止めるために戦う……と言いたい所だけど、ただでさえ魔術師としてヘツポコなのに、サーヴァントまで見ての通り滅茶苦茶なのだ。

この先の展望なんて全くない。唯一救いがあるとするれば、遠坂が味方である事位だ。「取り敢えず、遠坂と一緒に動こうと思うけど……俺と同盟を組んでくれるんだろ?」

遠坂は、あの哀れな元神父の前でそう言っていた筈だ。

「……確かに、私はそう言ったわ。何も考えず、そう口にしてしまった。……あのね、同盟っていうのは、双方にメリツトがあるから組むものなの。けれど今現在、私が衛宮君と同盟を結ぶメリツトは一切無いわ。残念ながらね」

厳しい現実を口にする遠坂。

「けど、面倒見てくれるって、さっき……」

「面倒を見る、ね。言峰もあんな調子だし、アイツとの約束なんて守らなくても別に問題ないのだけど……例えば、仮に私が貴方の面倒を見るとして、セイバーが他のサーヴァントと戦っている時に貴方が第三のサーヴァントに襲われたりしたら、どうなると思う?」

「それは……」

魔術師ではサーヴァントに太刀打ち出来ない。

だからサーヴァントはサーヴァントと、魔術師は魔術師と戦う。

聖杯戦争における基本中の基本である考え方だ。

しかし、俺のサーヴァントはいつも俺の傍にいてくれる訳ではない。一人でいる時に他のサーヴァントが襲ってきたら、成す術なく殺されるだろう。

それは、仮に俺一人じゃなく遠坂が隣にいたとしても同じことだ。遠坂だけなら逃げることが出来るかも知れないが、俺という足手まといがいたら……。

そんな事にならないように、遠坂は俺と手を切つて他の優秀な魔術師と組みたいのだろう。

だけど、未熟な魔術師に、意味不明なサーヴァント。俺達だけで、悪い奴を止める事なんて出来るのだろうか。

俺は、どうしたら――

「――ねえ、話は終わり？」

道の先から、どこかで耳にしたことのある声が聞こえた。

闇夜で見えにくいだが、何とか声の正体を捉える。

透き通るように白く、なめらかで長い髪。

小柄で、可憐な佇まい。

あの子は――

月が、何かを知らせるかのように、雲間から光を差し込む。

――その光が、少女の後ろに控える異形を照らし出す。

どこまでも巨大な筋肉。全身から迸る力の躍動と、狂気しか感じられぬ淀んだ瞳。視界にソレが居るだけで、俺は死を直感した。

一目で判る。アレこそ、四人目のサーヴァント。英霊が具現化した、災害にも匹敵する脅威。

人の域を超越した、バケモノだ。

「こんばんは。元気そうだね、お兄ちゃん」

「君！ そこから離れろ！ 後ろにバケモノが――」

「？ これはワタシのサーヴァントだよ。お兄ちゃんのサーヴァントは……さつきバーサーカーが真つ二つにしちやっただわ」

ワタシのサーヴァント？ まさか、こんな小さい子が、聖杯戦争に参加しているってのか……？ というかさつききの断末魔は、あのバケモノにやられた時の声だったのか。

……何故だろう、アイツが殺されたって聞いても、別になんとも思わないな。

「うーん……そう言えば、まだ名前を言っただけだね。はじめまして。ワタシはイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言えば分かるでしょ？」

巨人の傍らに立つ少女は、何を思ったのか。行儀よくスカート裾を持ち上げて、丁寧な挨拶をして見せた。

少女の名前を聞いて、遠坂の顔が僅かに歪む。どこかで聞き覚えがあるのだろうか。

「——じゃあ殺すね。やっちゃえ、バーサーカー」

その命を受け、巖の巨人が、地を踏み砕きながら俺達に向かって突貫する。

俺が声を漏らすよりも早く、セイバーが迅雷となつて疾駆した。

巨人の持つ断罪の大剣が振り下ろされる刹那、白銀の騎士が不可視の剣で迎え撃つ。

轟音、閃光。

「うおっ！」

巨人の一撃は、ただの余波だけで空気を震わせ、アスファルトを割り、草木を薙ぎ倒した。

セイバーも、その手に握る不可視の剣に魔力の光を迸らせて巨人の猛威を受け止めめるが、あまりの威力に思わず体勢を崩す。

巨人はその隙を見逃さず、獰猛なまでの凶悪さを以て岩塊の如き刃を叩き付けんとす

る。

不味い、避けられない。セイバーが殺され――

「はア――ツ！」

大きく仰け反った体勢のまま、セイバーはその一撃を弾き返した。

防御の反動で倒れ伏すかに思われたセイバーは、爆発的な魔力の奔流によって体勢を立て直し、その勢いのまま反撃の一閃を放った。

巨軀からは想像し難い俊敏さを以て、反撃を回避する巨人。

「狂化しているとはいえ、尋常ではない膂力と敏捷性……さぞ高名な英雄なのだろう」

セイバーが、巨人をそう評する。流石に見た目だけでは、英霊の正体までは分からないのか。

バーサーカーは大きく距離を開けた後、セイバーに向かって跳躍した。

「■■■■■■■■■■！！」

狂戦士が咆哮する。

その重量でもってセイバーを圧殺せんと落下の勢いそのまま大剣を振り下ろすが、その攻撃は再び不可視の剣によって受け止められる。

あれだけの打撃をともに防ぎ、斬り返すセイバーの力は、あの巨人に劣ってはいない。驚くべきことに、小柄な少女は暴の化身と互角に打ち合っていた。

その理由は、傍目にも判るほどの絶大な魔力。

彼女は自らの一挙手一投足、全ての動きを魔力の逆噴射によって加速・推進させている。それによって生み出されるパワーは、バーサーカーにも対抗しうる程だ。

だが——その力を以てして尚、この巨人は強大だった。

己の肉体性能のみで圧倒的な力と速度を見せつけるバーサーカー。

理性など欠片も感じられぬにも関わらず、鋼の巨人はただ本能のみで空間ごとセイバーを蹂躪しようとする狂う。その腕から繰り出される大剣は、天の禍に他ならない。

僅かずつ押され、後退していくセイバー。灰色の異形は破竹の勢いで爆進し、次々と大剣を叩き付ける。

ただの余波でアスファルトが割れ、ブロック塀が舞い、電柱が砕ける。紙屑の如く、周囲の全てが崩壊し散乱していく。破壊の衝撃で、空気すら悲鳴を上げていた。

それは、さながら大嵐の如く。ただの打ち合いに過ぎぬ筈のこの一戦は、地を穿ち鉄を刻み空を割り、瞬く間に大地を蹂躪していく。

■■■■■■■■■■
!!!」

「——ッ！」

鬼気迫る程の気合を以て、少女と巨人が切り結ぶ。

力と速度に於いて、あの巨獣はセイバーをも上回る。その攻撃に技巧などある筈も無

いが、そんな物はバーサーカーにとつて必要ない。そもそも技とは、弱者と強者の差を埋めるために編み出されたもの。それを凌駕する程の差の前では、小手先の技など何の意味を為そうか。

莫大な魔力放出によって、瞬間的な出力ではバーサーカーに拮抗、或いは上回って見せるセイバー。しかし基本性能で劣っている以上、セイバーはどうしても攻勢に転じえない。

勝機を見据えるべく剣を交えるセイバーだが、このままでは埒が開かぬ事など彼女とて理解していよう。時間を掛ければ掛ける程、総合力で劣るセイバーは不利になっていく。

だが、嵐のようなバーサーカーの猛攻に、隙など欠片も見当たらない。一撃一撃の全てが必殺というその規格外を前にして、受けに回る以外の選択肢など——

「セイバー!!」

遠坂が、いきなり声を張り上げる。

「この辺りにはもう敵の使い魔は居ないわ! 貴女の本気、ここで見せて!!」

その言葉を受け、セイバーは僅かに笑みを零し——彼女の手に持つ剣から、魔力を孕んだ暴風が解き放たれた。

「風王鉄槌!!」
[ストライク、エテ]

竜巻など優に匹敵する暴風の一撃を受け、巖の巨体が大きく吹き飛ばされる。

「■■■■■■■■■■?」
 両者の間合いが、大きく開く。バーサーカーに叩きつけられた風は、そのまま周囲を取り囲む防壁となった。

風が、流れてゆく。

セイバーの手に持つ武器が、徐々にその姿を現していく。

この光。いと尊き輝きは、幾星霜流れようとも決して忘れないだろう。ここが戦場である事さえ忘我して、俺はその光に見入っていた。

遍く騎士たちの羨望の剣。人の願いを、星の力を秘めた聖剣。その名は——

「——^エ——_ス——
 約束された」

「■■■■■■■■■■!!!」
 バーサーカーが全力をもって突貫する。本能で察知したのだろう。その剣を前にして、生存する事は能わぬと。

光が渦巻く。

光が吠える。

天を仰ぎ、聖剣を構えた剣士が動く。燦然たる黄金の光は、地にあつて尚星にも届く純度を誇る。一目見て分かった。それは、星の光を集めた至高の宝具。触れる物全てを両断し、城さえ呑み込むその光は、空想の身でありながら最強に至る。

伝説は此処に。あらゆる騎士たちの誉れ、戦場に散った全ての者たちの誇りの結晶。眩い幻想は、見る者の心すら奪い、何より尊い光を成す。

「——勝利の剣——
!!!!」

「うわっ!!」
眩き光の奔流が、狂える巨人を飲み込んだ。

視界が真っ白に染め上げられ、思わず両目を瞑る。

轟音が収束した後、ゆっくりと瞼を上げる。そこには、直線状に深く抉られた地面と——上半身が完全に消滅した、バーサーカーの姿があつた。

「……………凄、……………」

呆けた顔をしながら、そう眩く遠坂。俺も、目の前で起きた光景が壮大過ぎて、その

場に立ち尽くす事しか出来なかった。

エクスカリバー、世界で最も有名な剣。遠坂のサーヴァントは、まさか彼の名高きブリテンの騎士王なのか……？

あの輝き、あの威力。なんて、デタラメな強さだ。伝説そのものじゃないか……！

だが、自らのサーヴァントが無惨な姿となったにも関わらず、白い少女は——
嗤った。

「アハハハハ！ やるじゃない、ワタシのバーサーカーを殺すなんて！」

一体、何が可笑しいのか。なぜ、自らの眷属が無惨に敗北しても尚、余裕を持った態度を取れるのか。

「でも、残念ね。アナタのサーヴァントがどれだけ強くても——」

俺は、自らの目を疑った。

「——ワタシのバーサーカーには勝てないわ」

消滅した筈の巨人の上半身が、元通りに編み上げられていく。

訳が分からない。いや、もしかして、これがバーサーカーの『宝具』なのか……？ だとしたら、滅茶苦茶過ぎる。死んでも生き返れる宝具だって——？

「自己再生、いや、これは最早時間の巻き戻しに近い、蘇生の呪い……！　だが!!」

セイバーが、再び聖剣を構える。まさか、あのとんでもない攻撃を、もう一度放つつもりなのか——!!

「凜、魔力は問題ありませんか？」

星の聖剣に光を収束させながら、遠坂に目を向けそう尋ねる。対する遠坂は自信タツプリの不敵な笑みを浮かべながらそれに応える。

「ええー！　後三、四発くらいなら問題ナシよ!!」

三、四発くらい、だつて？　マスターは、サーヴァントの代わりに魔力負担を肩代わりする。故に、どれだけ強力なサーヴァントと契約できたとしても、マスターの保有魔力が低かったらまともに戦えないのだという。

つまり遠坂は、あれ程の攻撃を連発出来る程のとんでもない魔力を持つてるって事か……!!

バーサーカーの体躯が、完全に修復される。同時に、セイバーの聖剣も魔力装填を完了させ、再び眩き光を帯び始める。

「———^ユ約束^クされた———」

二度も殺される訳にはいかぬと、狂戦士が天高く跳躍し、セイバーへと襲いかかる。だが、それは愚手。空中では身動きが取れない為、聖剣の一撃をまともに喰らう事になる。

誰もがセイバーの勝利を確信する中——白い少女がぽつりと、

「フッフ、愚かね……もうそれは効かないのに」

そう言ったのを、確かに聞いた。

「勝利の剣」

「!!!」

闇夜を照らす光の大柱が、狂える巨人を貫く——

「っ!!」

セイバーが何かに気付き、咄嗟に防御の構えを取る。そこに、光の中から躍り出た、傷一つ負っていないバーサーカーの一撃が炸裂した。

「!!!」

セイバーの生半可な防御を隕石の如き破壊力で叩き落とすバーサーカー。堪らず後退するが、逃げる事など許さぬと、バーサーカーは怒涛の追撃を繰り返す。

「……………え？ どういうこと!!」

困惑する遠坂。その反応を見て、愉しげに嗤う白い少女。俺も訳が分からなかった。意図せぬ奇襲により、防戦一方となっているセイバーに猛攻を仕掛けるバーサーカーの体は、無傷。聖剣をまともに受けたにも関わらず、その体躯には傷一つ無い。これは、一体……………？

「バーサーカーはね、」

少女が、自分の持っている人形を無邪気に自慢するような口調で、言葉を紡ぐ。「二度や二度殺したぐらいじゃ死なないし、一度受けた攻撃は二度と効かないの。凄いでしょ？ ウフフ。だからね、どんなに強いサーヴァントが相手でも、バーサーカーには勝てないわ」

少女の声は、この場に似つかわしくない程、明るく、無垢だった。だけど、その言葉は、絶望そのものでしかなかった。

俺も、遠坂も、言葉を失った。

少女の言葉が紛れもない事実である事は、セイバーの戦いを見ていたら分かる。

セイバーがバーサーカーの胸を斬ろうと剣を横薙ぎに振るうが、その刃はバーサーカーに届くことは無く、直前で何かに弾かれる。

「くっ」

それと同時に、大剣がセイバーへ振り下ろされる。返す刀で防御するが、防ぎきれず膝を付いてしまう。セイバーのガラ空きの胴体に、巨人の蹴りが炸裂する。

「がはっ！」

俺達の近くまで吹っ飛ばされ、地面を転がるセイバー。

「そんな……セイバーが……」

遠坂の顔が、絶望の色に包まれる。

セイバーは、左腕が折れたのだろう。片腕だけで剣を持ちながら戦っていた。

しかし、狂戦士は手心など加えない。際限など知らぬとばかりに、更なる速度で大剣が叩き付けられる。

一撃ごとに防御を破られ、体勢を崩しながらも、セイバーは無理矢理攻撃を凌ぎ続ける。

だが、それは一秒先の死を二秒後に引き延ばすだけの行為だ。終わりがすぐそこまで近づいている事は、当人が誰よりも知っているだろう。

「セイバー……」

自らのサーヴァントが苦戦する姿を見て、呆然とする遠坂。絶対の信を置く自らのサーヴァントが、手も足も出さず蹂躪されている事実を受け止め切れないのか。もしくはもっと単純に、年端もいかぬ少女が無慈悲な化物に蹂躪され、傷付けられていく凄惨な

光景に耐え切れなかったのか。

もし助けられるなら、今すぐにも飛び出すだろう。だけど……俺達じゃ、あんな化物に手出しする事なんて出来ない。

『魔術師ではサーヴァントに太刀打ちできない』——聖杯戦争に於ける大前提だ。
「イリヤ！ 待ってくれ！ こんな事はしたら駄目だ！」

無駄だと分かかっていても、そんな言葉が喉の奥から飛び出してくる。だけど、俺のそんな説得なんて、少女の心には響かない。

「何を言っているの？ お兄ちゃん。ワタシはマスターなんだから、敵を殺すのは当たり前だよ。お兄ちゃんは特別だけど」

少女は至極当然の事のように、そんな事を口にする。
間違ってる。こんなの間違っている。

「なんで——やめろ！ やめてくれ！」

俺は叫んだ。喉が千切れそうになるくらいの声で。けれど、いくら叫んだって、暴の化身が止まる訳が無かった。一撃、また一撃と、少女の命を削り取っていく。

「——しぶといわね。いいわよバーサーカー。そいつ再生するみたいだから、首を刎ねてから犯しなさい」

歌うように、少女はそう告げた。今——あの少女は一体何と言った。

——その瞬間、月の下に散る鮮血が、おれの視界を紅く染めた。地に倒れ伏したセイバー。動きを止めたバーサーカー。

……たった今、セイバーは、バーサーカーに斬り伏せられたのだ。

愉快そうに細められた少女の瞳が、ボロボロになったサーヴァントを冷たく見つめる。

セイバーはまだ死んではない。傷だらけになりながらも、彼女はまだ立ち上がろうとしている。

けれど、その小さな体に、もう戦う力など残ってはいない。血が滲むほど握りしめられた遠坂の拳が、何よりもそれを物語っていた。

少女の命令を、首を刎ね、犯せという残酷な命令を実行すべく、バーサーカーが再び動き出す。

何をしたって、少女も、巨人も、誰も止められない。

俺は、なんて無力なんだ。

俺は、何も出来ないのか。

だったらせめて——

「衛宮くん!!」

「お兄ちゃん!!」

——あ、死んだ。目の前で、巨人が岩剣を振り上げる。
まあ、女の子を守って死ぬるなら、

「犯せと命令するって事はよお〜」

巨人の動きが止まる。

それは、誰の声か。

姿を見なくても分かった。

「自分が犯される『覚悟』があつて言ってるんだらうなあ〜」

声が聞こえた方を見る。そこには、イリヤに後ろから抱き付き、スカートの中に手を這わせている首領。パッチの姿があつた。

「首領。パッチ!!」

「あれ? さつきバーサーカーが殺したのに——」

真つ二つになったら死ぬ。

そんな常識、コイツには通じない。

「紅茶しか無かったんだけどさあ、いいかな？」

首領。パッチはそう言つて、イリヤに無理矢理コップに入つた紅茶を飲ませる。

「え!! んん! んんんん〜!」

イリヤは紅茶を口に含んだ瞬間、その場に倒れこんでしまった。

「え!! 首領パッチ、お前何やつたんだ……?」

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■!!」

バーサーカーが怒声を上げる。目の前で戦っている相手さえ無視して、極大の殺意を首領。パッチに叩き付ける。

しかし、バーサーカーは、一步も動かない。いや、動けないのだ。要するに今の状況、バーサーカーにとっては敵サーヴァントに自らのマスターを人質に取られているようなものだからな……狂化して理性を失つていふとは言え、自分が今動かない方がいい事は本能で分かるのだろうか。

首領。パッチが、いやらしい手付きでイリヤの足をさする。

「さあ〜て! ハアハア……ブヒっ、イリヤさんをフィストファツ「おいやめろ!!」

「くべらっ!」

首領。パッチがマジで洒落にならない事をする前に蹴り飛ばす。

イリヤは……頬をぺちぺちと叩くが起きない。まあ、今は眠っているままの方が都合がいいか。

「セイバーッ！」

バーサーカーが静止するや否や、遠坂がセイバーに駆け寄り、治癒魔術を施す。

「……ごめん。令呪を使うべきだったのに……何も、出来なかった」

「ハア、ハア……いえ、序盤で令呪を使ってしまうのは得策ではない。くつ、使わなかったのは正しい判断でしょう。……それより、バーサーカーがいつ動き出すか分かりません。治療を終えたら、即座に退きましよう」

「そう、ね……あれだけ研鑽を積んだのに、いざつて時には体が動かないものね」

粗方傷を塞いだ後、セイバーに肩を貸す遠坂。ふと、セイバーが顔を上げてこちらに視線を向ける。

「礼を言っておきます、少年。貴方のサーヴァントがいなければ、私は殺されていた」
真つ直ぐに俺の目を見つめながら、改まって感謝の言葉を述べるセイバー。

なんとなく、テレビとかでたまに映されている、会見で報道陣に向かつて謝罪をしている政治家に似てるな、とかそんな事を思った。

「うわあああん!! 政務調セイ、セイツィツム活動費の、報告ノオオー!! ウエエ、折り合いを付けるっていうー! 高齢者問題はー! 我が県のにドウワツハツハツ

ハアーン!! 我が県のみぬッハアアアアア!! 我が県ノミナラス! やつと議員に」
 「うるやこ」

なぜ数ある政治家の中から日本政治史に名を残すレベルの変態をイレギュラーピックアップしちゃったんだよ……後サラツと思考を読むな。

——ん? 今、いい歳こいて幼稚園児みたいに泣きじやくる駄目なオッサンが脳裏に浮かんだけど、誰だコイツ? こんな奴見た事も聞いたこともない。なのに、俺はコイツを知っている。何だろう、この気持ち悪い感じ……。

「衛宮君」

遠坂が俺を呼んだので、取り敢えず深く考えるのをやめる。まあ、きつとどつかで見かけた事があるのだろう。

「借りが出来たわね」

「いや、俺は何も……」

そう、俺は何も出来なかった。

あの時、咄嗟に飛び出したけど、首領パッチがいなければ俺は間違いなく叩き潰されていたし、そのままセイバーも敵の手に掛かっていたに違いない。

俺は——

「取り敢えず、ここから離れましょ。というか、教会に戻るのが一番いいかしら」

「……もう二度とあそこには行きたくないな……家に帰ろう。イリヤは取り敢えず俺の家に連れて行くよ。俺はまだ殺さないって言つてたし、同盟を組んでくれるかも知れないだろ」

「……そうね。じゃ、行きましょうか」

夜の道を、特に会話もなく進んでいたら、いつの間にか見慣れた町並みの交差点に着いた。

遠坂が唐突に口を開く。

「じゃあ、私はこっちだから」

「……そうか。ここから先は、それぞれの家へ続く道。衛宮士郎と遠坂凜は、ここで別れなければならぬ。」

遠坂は、きっと他のマスターを見つけて同盟を組むのだろう。となれば、次会う時は敵として対峙してくる、という事か。無視してくれれば、それが一番ありがたいけど……。

「ああ、応援してるぞ、遠坂」

何を言えば良いか分からず、そんな、気休めにもならない事しか言えない。

だけど、俺のそんな言葉を聞いて、遠坂が少し逡巡するような仕草をする。

しばらく瞑目し、考えをまとめたのだろうか。俺の目を真っ直ぐに見つめて、導き出した結論を語りだした。

「……わたしにとつて貴方と同盟を組むメリットが無いって言ったこと、訂正するわ。貴方のサーヴァントは意味不明で行動が全く予測できないけど、少なくとも衛宮くんを守つ……てはいないけど、付近に出没したり、衛宮君を殺そうとするサーヴァントやマスターに攻……ちよっかいをかける事は分かったわ。そして、曲がりなりにも、ランサーとバーサーカーを撃退……何とかした。だから」

遠坂がちら、とセイバーに視線を向ける。それに応えるように、セイバーが続きを語る。心なしか顔色が優れないが、何でだろう。バーサーカーに受けた傷のせいじゃない事は分かるけど。

「利点が……無いとは言いません。しかし不確定要素も……」

多くある為同盟は結ばないほうがいい、と言いたかったのだろうか、強くは主張しない。

マスターの方針には従うつもりなのか。例えそれがどれだけ不本意なものであつても。

「だから、衛宮君と手を組んであげる事にしたわ。借りも絶対に返すつもりだし。不確定要素は、まあ、なるようになるわよ」

「遠坂の足を引っ張るかもしれないんだぞ？　俺のせいで、遠坂の命が危なくなるのは嫌だ」

一応、反対しておく。遠坂に死んでほしくないのは本当だ。けれど、遠坂は俺のそんな言葉を鼻で笑い飛ばし、

「命の危機なんて常にあるわよ。『戦争』をやっているんだもの。それより、衛宮君は私と組む気はあるの？」

「え？　そんなの願ったり叶——」

いや待て。俺は、悪い奴が聖杯を手にしないうちに戦うと決めたんだ。だから、遠坂には一つ聞いておかなくちやいけない事がある。

「——遠坂、もしお前が聖杯を手に入れたら、何に使うつもりなんだ？」

「え？　そうね……取り敢えずコレクションにでもしようかしら。あつて困るものでもないでしょうし」

なんともアツサリとした答えを返された。

……まあ、何も知らない俺に事情を説明して、助けてくれたんだ。遠坂が悪人なわけがないか。

「分かった。同盟を組もう。聖杯も遠坂に譲るよ」

「は!!　え？　いや、そうよね。アンタは悪い奴を止めたいだけだものね……じゃあ、同

盟成立ってことで」

そう言うのと、背を向けて歩き出す遠坂。なんかサツパリした奴だな。

そんな事を思いながら、俺も足を踏み出す。長い一日だった……………。

「トコロカリ。アアアアアアアア！」

首領。パッチがプルプルした何かで俺を叩いてくる。いや、頼むから大人しく俺の一日を終わらせてくれよ……………。

5. 同盟

—— 遠い、夢を見る。

ここではない、どこか。

いまではない、いつか。

眼前に広がるのは、何処までも続く荒野と、数多の人影。

地平線は、端が見えぬ程の大軍勢で埋め尽くされていた。幾千、幾万、幾十万——

戦争だ。俺の想像を絶する大戦争が、今まさに起ころうとしているのだ。

俺は、『戦争』というものを実際に見た事も、巻き込まれた事もない。

だけど、沢山の人が死ぬ『地獄』の中にいた事はある。どちらも、個人の手力ではどうする事も出来ないものだ。皆が抗う術もなく死に、救われることは無い。

後ろを振り返ると、小さな村があった。人々は逃げ惑い、子供は泣き叫んでいた。彼等を選択肢などない。あの大軍勢は、こんな小さな村など瞬く間に蹂躪し、更地と化するだろう。

あの村に住む人々が生きるためには、自らの住処を棄てるしかない。

戦争によって不幸になるのは、いつも弱い人々だ。奪われ、犯され、殺される。そこには正義も、救いも、存在しない。

時代と共に戦争の形が変化しようとも、今も昔も、きつと未来でも、それは決して変わらないだろう。

そう、思っていた。

ふと、あの大軍勢に向かって爆進する、数人の人影（？）が見えた。

「ハジケ組バンザアアアアアアアイ!!!」

「ウンコ派サイコオオオオオオオオ!!!」

「とこ屁組舐めんじやねえええええ!!!」

何か意味不明な事を口走りながら、躊躇いもせず突撃して行く。

彼等の姿は、夢に出て来そうなくらい奇怪奇天烈なものだった。

金髪アフロで鼻毛が異様に太くて長い奴。

半透明なプルプルした何か。

頭がウン……チョコレートソフトクリームの上の方みたいな人。

クレーンゲームの景品みたいな小動物。

普通の見えた目をした人が三人。

そして――

「わんぱくアタック!!」

——オレンジ色の、見覚えのあるアイツが、彼等と共に戦っていた。

その後、三十分と経たずに、数十万の軍勢が全滅した。

勝利でも、壊滅でもない。全滅である。

彼等の人数（人？）は十人に満たないにも関わらず、全員無傷で。しかも、彼等は敵を誰一人殺していない。無力化したただけだ。

なんという、圧倒的な力。彼等は、文字通り『戦争を終わらせた』のだ。

「今日から全員田楽組だ」

「マジで!!」

「待っていやがれ! ツル・ツルリーナ三世!!」

意味不明な事を叫び、次なる戦場へと駆けてゆく彼等の背中を見ながら、思った。彼等こそが、数え切れない程の人々を、世界を救う、

本物の——『英雄』なのだろう。

目が覚める。

じりじりと体を焼く日差しは、心なしかいつもより明るい気がする。ひよつとして……。

枕元の時計を確認する。今、丁度一時になった。

「……寝過ぐした……」

まあ、今日は日曜日だから大丈夫だけど。それにしても……。

「——何だったんだ、あれ」

今の今まではつきり見えていた、おかしな夢。

夢にしては、妙な現実感が残っている。だというのに起きてみれば、靄もやがかかったように要所要所を思い出せない。

でも、ただ一つ覚えているのは、あの姿。

——オレンジ色のトゲトゲしたアイツ。

細かい所はうまく思い出せないし、それ以外の物になんて見覚えはない。けど……輪郭がぼやけてはいたが、見違える筈もない。あれは、間違いなく——

「おはよ、お兄ちゃん」

枕元に、白い少女が座っていた。

「——イリヤ、起きたんだね。その、体は大丈夫なのか？」

一昨日の夜の戦いの後、イリヤはずっと目を覚まさなかった。首領パッチが何を飲ませたかは知らないけど、昨日丸一日眠り続けていたのだ。今の体調は大丈夫なのだろうか。見た所元気そうだけど……。

アイツ……昨日は大変だった。首領パッチを藤ねえと桜にどう説明しよう、というかコイツが街に出たら大混乱が巻き起こる、という事に気が付き、屋敷を縦横無尽に駆け回る首領パッチを何とか捕まえ、夜中の内に急いで、嫌々教会に向かったのだ。

言峰さんからは「一般人の目を誤魔化す魔術すら扱えんとは、クク、魔術師としては三流、いや、最早ただの一般人Bではないか」とか言われて煽られまくる羽目になったが、『対象者がただの子供に見える魔術（一般人にしか効かない）』をかけてくれた。

そして俺の目からは首領パッチが首領パッチとして見えているので、俺は決して一般人Bじゃない。魔術師としては未熟だとしても……。そう言ったら、「そうだな。君はリッパな魔術師だ。ああ、エライエライ。エライゾー」と言われ拍手された。ムカつく。「うん、大丈夫だけど……シロウ、怒ってる?」

言峰さんにバカにされまくった事を思い出して怖い顔になっていたのだろう。イリヤを怖がらせてしまった。

「いや、怒ってないよ」

そう言うのと、何処からか現れた首領パッチが俺の肩を殴って来た。

イリヤは満面の笑みで鮭のバターホイル焼きを食べていた。俺の作った料理をここまで幸せそう食べてくれた人は、イリヤが初めてだ。

おいしそうに食べてくれた人は……まあ、ものをおいしそうに食べる事にかけて、藤ねえの右に出る者はいないが。

「どうしたのシロウ？ ワタシの顔に何か付いてる？」

「ああ、いや、喜んでくれて何よりだ、と思っただけだよ」

そんなこんなで他愛もない話をしながら口を動かしていたら、いつの間にか二人とも料理を食べ終わっていた。イリヤがテレビを付けると、ニュース番組が流れ始める。……海外ではごちそう様と言う文化が無いんだっけな。まあ、そんな事気にしないけど。

ニュースは、最近頻発している行方不明事件や集団昏睡事件についての報道を終え、昨日起こったという人身事故について取り上げ始める所だった。

『昨夜、冬木市内にて、猛スピードで走るバイクに全身蒼タイトの男性が撥ねられたという目撃情報が複数ありました。しかし警察は、犯人はおろか撥ねられた男性すら見つけられておらず、血痕なども無い事から、集団的なイタズラ電話であると断定しています。街の人は——』

イタズラかよ。暇な人もいるもんだなあ。

——いや待て。全身蒼タイツだつて……？

「まさか、ランサーか!! アイツ道走つてるバイクに撥ねられたのかよ!」

「ランサー? シロウ、ランサーのコトを知ってるの?」

イリヤが振り向く。……この子に、俺の持つ情報を教えてもいいのだろうか。……イリヤと同盟を結べさえすれば、話しても問題ないんだけど。

というか車道を歩く時は車やバイクが来ていないか位確認しろよ……。

「ああ、一昨日な。……イリヤ、俺と同盟を結ばないか? 交換条件として、ランサーの情報を教えるよ」

交換条件、なんて使い慣れない言葉を使って、同盟を持ちかけてみる。交渉なんて藤ねえとしかやった事ないけど……。

「え? うーん……いいよ。シロウは弱いから、バーサーカーで守ってあげる」

アツサリ承諾してくれた。理由が情けなき過ぎる……。

「……そういえばシロウ、シロウのお父さんやお母さんは今どこにいるの?」

どうしたのだろうか。何の脈絡もなく、そんな質問をされた。

「え……? いや、お母さんは、随分前に死んだよ。親父も、結構前に死んだ」

俺の言葉に驚いたのか、イリヤは一瞬目を大きく開け、そのまま少しの間、言葉を失っていた。

「——そっか。死んじやったんだ……」

嘔み締めるように、遠くを見つめたままそう呟くイリヤ。彼女は、どこか空虚さの宿る悲しみをその顔に浮かべていた。

「ああ、いや、もう昔の話だし、気にしないでいいよ」

慌ててそう付け加える。気を使わせちゃったかな。適当な嘘をつけばよかった。目を伏せ、再び口を噤むイリヤ。やばい、何か他の話題を考えなければ。話題話題……。

「そういえば、イリヤは聖杯にどんな願いを叶えて貰いたいんだ？」

俺は、悪い奴を止めるために戦ってるんだ。悪い奴と手を組んでしまつては本末転倒である。彼女の目的如何では、前言を撤回せざるを得ない。

イリヤは、しかし俺のそんな質問に対して、

「願いを叶える……?」

何故か、首を傾げた。もしかしてこの子は、聖杯が何なのか知らないまま、それを手に入れようとしているのか？

「……イリヤは、どうして聖杯を手に入れたいんだ？」

質問を変えてみたら、今度はすんなり答えてくれた。

「聖杯はアインツベルンの悲願だから、ワタシが完成させなくちゃいけないの。それが、お爺様から与えられた使命」

……成程。この小さな女の子を戦争に利用してやがるのが、その『おじい様』とやらか。間違いない、そいつは悪い奴だ。聖杯を渡すわけにはいかない。

……だけど、ここで同盟を切ってしまえば、誰がこの子を助けるんだ？

取り敢えず、この子の傍に居よう。これからどうするかは、明日慎二にでも相談すればいい。

「イリヤ、聖杯つてのは何でも願いを叶えられるものなんだ。イリヤは何か、願い事とかは無いの？」

「そんな事したら、おじい様に」

「大丈夫だよ、バレないって」

我ながらなんと頭の悪い言葉であろうか。けど、そんな言葉を真に受けてくれたのだろうか、ぼしよりと、イリヤが自らの心の裡を明かしてくれた。

「……また、お父様と、お母さまと一緒にいたい」

そんな、普通の人にとっては当たり前の事を、少女は願うのだという。

おじい様とやはらは、この幼気な少女から両親を奪ったのか。己の裡で、ふつつつと怒りが沸いてくるのを感じながら、しかし表情は柔和に取り繕って、

「分かった。聖杯はイリヤに譲るよ。願い、叶うといいな」

そう、答えた。

……やばいな……遠坂を頑張つて説得しないと。セイバーは、ええと、セイバーどうしよう……そうだ、慎二に知恵を貸してもらおう。今度アイツに何かおごらないとな……。

その後、これと言つて話すような事もなく、二人で静かにお茶を啜っていたら、呼び鈴の音が鳴った。

郵便だろうか、そう思い、引き出しからハンコを取つて玄関まで歩く。……廊下の窓から首領パッチの姿が見えたけど、無視する。見てない。俺は首領パッチが鎖剣で庭を滅茶苦茶にしてる様子なんて見たくない。

「どちら様でしょうか」

と言いつつ引き戸を開ける。あれ？ 誰もいない。足下に、白い封筒が置かれているだけだ。

「土郎！ 今夜は蛇鍋だぜ！」

首領パッチが荒縄でグルグル巻きにされたナニカを引きずりながら近付いてきた。

「ナニソレ……モゾモゾ動いてて気持ち悪いんだけど……」

蛇鍋、という事は、いや、想像もしたくないな。そのサイズの蛇とか……どこで捕まえて来たんだよ。

「ていうか醤油付けて食べえ！ 今すぐ！」

「喰えるかつ！ 捨てて来なさい」

「そんな〜！ ママなんか大嫌いつ！」

うわああと泣きながら、首領パツチはナニカを引き摺りながら走り去っていった。

—— 赤くベツトリとした円が、ナニカがあつた場所に残されていた。そこから延びる線が、アイツの走り去つた跡に続いている。

はあ。明日、桜が来る前に何とかしないと、殺人現場か何かと勘違いされるな……。

「つと、そんな事よりこの封筒は誰から来たんだ？」

封を切り、中に入っていた手紙を取り出す。そこには、見慣れた文字が書いてあつた。

『深夜三時 商店街近くの公園に來い』

……全く。慎二の奴、一体何の用だ？

6. 親友と騎兵

「こんな時間に呼び出すなんて」

深夜2時。日はとうの昔に沈み、街行く人影は一つとして見当たらない。

だから、寒空の下、公園のベンチに一人座っている男の姿は異様だった。俺の声を受け、ゆっくりと瞼を開く。

「五分遅刻だ。衛宮」

開口一番、そんな偉そうな言葉を口にする慎二。まあ、コイツはこういう奴なのだ。今更何も文句は無い。大人しく謝る。

「悪かったよ。それより、何か要件があるんだろ？ 歩きながら話そう。寒いから」

日が落ちてから随分立っているせいで、瞼が凍り付きそうな程に寒い。動いていれば少しはマシになると思いきや提案したが、

「いや、すぐ終わる」

素気無く断られた。

「要件は一つだ。衛宮、今すぐ聖杯戦争から降りろ」

「な———！」

聖杯戦争と、慎二は確かにそう言った。

何で知ってるのかと、俺が言葉を発する前に、慎二は手袋をずらして手の甲を見せてきた。

そこには、真つ黒な刻印が刻み込まれていた。俺が持っていたやつと色は違うが間違いない。聖杯戦争にマスターとして参加する者の証、令呪だ。

「まあ、僕はまっとうなマスターじゃないが」

「? どういう意味だよ」

「……お前には関係ない」

一蹴された。凄く気になるけど、魔術師は自らの技術を口外しないものだ。深く立ち入らない様にしよう。それより――

「教会に行けばマスター権を放棄出来る。さっさと行つてこい」

「いや、それが、何故か放棄出来なかつたんだよ……」

「は? 何言つてんだよ衛宮」

慎二が眉を顰める。俺は、今迄何があつたのかを全て慎二に打ち明けた。

「―――つて感じだ。」

「……………」

話を聞き終えた後、慎二は瞑目し、しばし沈黙してしまった。

大人しく返答を待つ。マフラーから漏れ出た吐息を電灯が照らし、淡く白い靄が現れる。

……寒い。膝までガタガタと震え、齒はカスタネットのように軽い打音を奏で続ける。

『石焼くき芋くお芋く』

ふと、そんな歌が耳に入り、衝動的に買いたくなつた。

「こんな時間までやってるんだな。客来ないだろ……ん？ んんん!!」

よく見ると、石焼き窯を積んだリアカーを引いているのは、首領パッチだった。

「芋はいらんかえく。一つたったの3万ペソ」

「高っ! ……いのか? いや、何やってんだよ首領パッチ」

窯の煙突からは絶え間なく黒煙が流れ出ている。嗚呼、環境破壊……だが、独特の甘美な匂いが、俺の腹を刺激してくる。まあ、3万ペソも払うつもりは毛頭ないけど。……3万ペソって日本円でいくらだ? そもそもどの国の通貨だっけ?

「あ、士郎だ。焼き芋砲発射ア!」

リアカーから熱々の焼き芋が発射され、俺の顔面に飛来した。咄嗟に手で受け止める。

「熱ッ!!」

「食えっ!」

えええ……。いや、熱すぎてとても食えたものではない。

仕方なく、両手で弄びながら芋の熱を冷ます。程よい熱さになった芋を両手で包むと、かじかんだ手がほぐれていくのを感じた。……けど、何故サツマイモを……?

——ふと、慎二の傍で武器を構える人影に気付く。いつの間に現れたのだろうか。

腰どころか、足まで届くのではないかという紫の長髪。すらりとした長身に、女神かと思ふ程美しく整った顔。両目を覆う眼帯が、顔の上半分を隠しているため、その表情を窺い知る事が出来ない。

しかし、こちらに殺気を向けている事だけは分かった。

悪寒が走る。

あまりの寒気に、首の後ろが斬りつけられたように痛む。

バーサーカーのような、敵に絶望を与える程の威圧感はない。だが、決して振り解けない、ねっとり絡みつくような死の予感を相対した者に与えてくる。

「手を出すな、ライダー」

慎二が、姿を現した自らのサーヴァントを制止する。

女はそれに応えず、手に持つ釘のような武器をより強く握りしめた。

「シンジ、このサーヴァントは危険です」

ライダーが、ひっそりとした声でそう告げる。

「グヘヘ。ここまでだ、仮面ライダー1号よ。手こずらせおって……」

首領パッチが、今週のやられ役怪人Bみたいなセリフを吐く。

「仮面ライダー？ いや、確かにライダーが仮面を付けてるけどさ。……あれ仮面か？」

「先刻は不覚を取りましたが、ランサーに負わされた傷はもう癒えました。次こそは――」

ライダーの纏う魔力が増幅していく。不味い、やる気だ。慎二は、しかし止めるのも面倒だというばかりに、溜息をつくだけだ。

「またかよ、ハア……。もう勝手にしろ。痛い目を見て学ばばいいさ」

「ちよ、慎二!! 俺は別にお前と戦う気は――」

「分かってるよ、うるさいな……。まあ、いい機会じゃないか。自分のサーヴァントが戦う様子を観察して、次の戦いに生かすんだな」

そう言って、二人の戦いを見るよう促す慎二。けど、痛い目を見るって……。まるで首領パッチの強さを知ってるみたい――いや、普通に自分のサーヴァントに自信がないだけか。『ライダー』はその名の通り自らの直接戦闘能力の低さを乗騎で補うクラス

だ、と遠坂は言っていた。だから……………ん？　そういえば、首領パッチのクラスって、何だ……………？

「シッ——！」

ライダーが特攻する。音さえ置き去りにする速力と絶大な魔力をもったそれは、離れていても全身の毛が逆立った。

「おつ、ブランコあんじゃん〜」

しかし、首領パッチがブランコの方に走って行った為、その攻撃は空振りに終わる。アイツ何やってんだ……………。

「やっぱ公園に来たら最初はブランコだよな〜」

「祖国ニ帰りタイ……………」

首領パッチは再び攻撃を仕掛けるライダーを気にも留めず、ブランコに乗ってブラブ……………いやちよつと待て誰だあの鎖に繋がれたムキムキの白人!!

「殺す」

ライダーが一瞬にして首領パッチの背中に回り、釘剣を突き立てる。

「あー！　これブランコじゃなくてフランコ——ぎやあああああああー！」

……………うん、でしょうね。というかフランコって誰だよ。何でこの公園ブランコの横に白人が監禁されてるんだよ……………。

鞭の如くしなりを持った強烈な蹴りが、首領パッチの胴をえぐる。そのまま公園の中心まで蹴り飛ばされ、地面に突っ込む。

「いでええ！ 何だよ！ うわああん！ 順番抜かしだ！ ママああああ！ うーううう〜♪」

起き上がり、小学生のように泣き喚く首領パッチ。こんなのが俺のサーヴァントだなんて、恥ずかしいからやめて欲しい。頼むから真面目にやってくれよ……。

ライダーの方に目を向けると、

「ワタシハ戦ウ！ 自由ノ為ニ！」

自らを縛る鎖を引きちぎった白人にボコボコにされていた。

ライダーが苦し紛れに釘剣を突き出すが、フランコ（？）はそれを引つ掴み、逆にライダーの体を引き寄せて腹部に膝蹴りを叩き込む。

たまらず後ずさるライダーの長髪をフランコは引つ掴み、そのままブン振り回したり、何度も地面に叩きつけたりした。

その後ライダーを公園の外へと放り投げ、首領パッチに駆け寄る。

「ドンパッチーサン。ワタシハ頑張りマシタ」

「大儀じゃ。手錠を外しておじやる」

そう言つて、首領パッチは何処からか鍵を取り出し、フランコの手錠を外した。……

いや、お前の仕業だったのかよ。

フランコは手錠を外されると静かに涙を流し、

「ah, now I can go back my home……………」

そう呟きながら成仏していった。

幽霊だったのかよ。いや、もうその程度じゃ驚かないけどさ。隣を見ると、慎二が完全に静止していた。ああ、首領パッチに対する免疫が足りなかったか……。

暫くすると、ライダーが、よろめきながら再び公園に姿を現した。凄まじい執念だな……。

「なあ首領パッチ、あの人に何かしたのか？」

「別に。昼間、庭で遊んでたらノツポの女が来たから『デカツ！ 女型の巨人だアアア！』って言ったらいきなり襲いかかって来たからしばいてグルグル巻きにしたらだけだぜ」

「……………」

別に、じゃねえよ。それが原因だろうが。というか昼間首領パッチが縄でぐるぐる巻きにしていたのは、ライダーだったのか。恐らく彼女は、自分の身長にコンプレックスがあるのだろう。それを見ず知らずの奴にいきなりバカにされたのだ。殺意の一つや二つくらい持つのも無理はない。

けど、ライダーの体は見るからにボロボロで、とても戦えるような状態ではない。こころへんでやめておいた方が良くないだろうか。

「なあ慎二、もう——」

「死にぞこないが！ 引導を渡してやろう」

「ちよ待つ——！」

俺の心配など知らぬとばかりに、首領パッチがネギを持ってライダーに襲いかかる。相対するライダーは、——何を思ったのか。武器を構えるのではなく、自らの後頭部に手をやった。

無防備に立ち尽くすライダーへ無情なる一撃が振り下ろされる寸前、

——はらり、と。その顔から、紫黒の眼帯が剥がれ落ち、

全てが、静止した。

彼女に叩きつけられる筈のネギは、石細工のように罅割れ、砕け散った。首領パッチが疾駆したことにより巻き起こった砂埃は、空中で凝固し地に堕ちた。

俺の吐く吐息、地を撫でる風さえも、物理法則を無視して静止する。

「な——あれ？」

気付けば俺の全身もまた、余す所無く凍り付いていた。血液はドロドロと固まり始め、感覚すら薄れて行く。

あれは——魔眼だ。

本来、外界からの情報を取得する為の器官である眼球を、逆に外界へと働きかける器官へと変化させたもの。一流の魔術師なら使える者もいるらしいが、ライダーのそれは魔術なんていう生易しいものではない。

物理法則の一切を無視した、神話にしか存在し得ぬ奇跡そのもの。まさか、ライダーの正体は——

「ぎゃあああああ！ ニンジンになるうううううう！」

首領。パッチがニンジンにされていた。

……………うん。もしかして、と思ったけど気のせいだった。見たものをニンジンに変える怪物なんて聞いたことも無いな。

「!? ……………え？」

一瞬、いやタツプリ十秒程、思考停止に陥るライダー。いや、うん。多分、ライダーは見たものをニンジンに変える能力なんて持ってなかったんだろうな……。

空中で一瞬停止した後、首領パッチは地面に落ちた。

「クソっ！ オレはもうニンジンとして生きていくしか無いのか！」

そう言って、ズブズブと地面に埋まっていく首領パッチ。

「……定期的に水をかけてね、士郎」

「嫌だよ」

何が嫌で首領パッチを栽培しなければいけないのか。需要皆無だろ。

「ちえつ。ならもう良いや。奥義、人參シリシリいいいい!!!」

「ごぼつ———!!」

人參が、地中から稲妻の如き速さで射出され、呆けきっていたライダーの鳩尾に突き刺さった。

水風船が破裂したような声を出し、地へと崩れ落ちるライダー。

内臓が傷ついたのだろうか、滝の如くその口から真紅の血が流れ出て、地を赤く染める。

「うわつ、おい! やり過ぎだろ首領パッチ!!」

「許してクレメンス」

「いや、許してって言われても……。慎二! もう十分だろ。ライダーの武器を降ろさせてくれ」

隣で固まっていた慎二の体を揺さぶる。はっ、と気がつくくと、シンジはライダーに対し、いきなり怒声を上げた。

「おいやめろライダー!!」

その声で、ライダーの動きが止まる。彼女は——あろうことか、釘剣で自らの首を切り裂こうとしていた。

自害、だつて?　なんでそんな……。

『目』ならまだしもそれは流石に隠し切れぬ。それとも自分の真名を他のマスターに喧伝広告したいのか?　ライダー」

しかし慎二は、それを咎めるのではなく、よく、分からない事を口にした。『目』というのは先程の魔眼を指しているのだろうが、『それ』つて、何だ……?　

俺には理解できなかったが、ライダーには言わんとする事が伝わったようで、その手に握る武器を下ろして謝罪した。

「カフっ、……すみ、ません……」

「つたく……」

舌打ちしながら、つかつかとライダーに近寄る慎二。地に伏せる彼女を冷たく見下ろし、

「……よく分かつただろ。お前の足りない頭でも。いい加減、自分の弱さを知れよ」

そう、蔑むように吐き捨てた。その言葉には、自らのサーヴァントに対する、諦めにも似た何かがあるようにも思えた。

慎二の言葉はいつも、厳しく、嫌味つたらしい。誰に対してもそんな感じなので、他人からも余り好かれれない。本人は全く気にしてないけど……。

まあ、口では悪態をつきながらも、しゃがみ込んでライダーの傷を治療するあたり、マスターになっても相変わらずだな、と思う。根はいいヤツなんだ。口と態度が悪過ぎるせいで誰も気づかないけど。

「……衛宮、俺に何か聞きたい事があるんじゃないのか？」

慎二が、ライダーの治療を続けながら、唐突にそんな事を言ってきた。聞きたい事……。そうだ、聞かなければならない事が、いくつかあったんだった。

けど、今は暇が凍りつきそうなくらいに寒いし、わざわざここで聞く必要も無いだろう。別に、明日学校で聞けば――

「まさかお前、明日以降も学校に行くつもりなのか？」

非難するような口調で、慎二は俺に問いを投げかける。

「――え？ いや、サボる訳にもいかないだろ？ 授業は只でさえチンプンカンプンなのに」

「明日死ぬかもしれないのに、いつ役に立つかも分からない勉強がそんなに大事か」

「それは……」

確かに、俺達は今、聖杯戦争とかいう馬鹿げた殺し合いに巻き込まれているのだ。学

校なんて行つてる場合じゃない、というのも一理ある。

というか、今の言動からすると、慎二はもう学校に来ないのか……。

だったら今、聞くべきことを聞かなければいけないだろう。

さて、何から尋ねようかな——

「質問は一つだけだ。これ以上ここに留まると、面倒事が増える」

……マジかよ。いや、本当はこのくらい警戒するのが正しいのだろう。俺にはまだ、イマイチ危機感が足りていないらしい。

一つ、か。だったら単純で、そして、俺の聞きたい事が全て詰まつてる質問をしよう。

「慎二、——俺はこれから、どうすれば良いんだ？」

俺が何を成し遂げたいのか、どんな目的を持つているのか、なんて事は言わない。そんな事、俺の事を俺よりもよく知つてるシンジに言う必要は無いだろう。

さて、慎二はなんて答えてくれるのだろうか——

「……甘つたれた考えを捨てろ、なんて言つてもお前には無理な話か。そうだな……取り敢えず、マスター全員と会つてみるよ。ヤバイ奴がいたら、バーサーカーのマスターと結託して叩き潰せばいい。その後は、全てが終わるまで教会の中で大人しくしてろ。お前のサーヴァントは、まあ、誰か殺せる奴が殺すだろう」

思ひの外事細かに、今後俺がどうすればいいのか答えてくれた。……なんだかんだ

で、やっぱり良い奴なんだな、慎二。

「……僕がわざわざ懇切丁寧に教えてやったんだ。大人しく言う通りにしろよ」

嫌味つたらしく付け足す慎二。まあ、慎二なりの照れ隠しなのだろう。

……それより、全マスターと会ってみろ、か。言うのは簡単だけど、いざやるとなると、できるのか？ そんな事……。

まだ会えていないのは、ランサー、キャスター、アーチャー、アサシンのマスターか……。

まあ、何もせずにウダウダしてるより、やる事があつた方が有難い。

「ありがとうな、慎二」

俺の言葉に、シンジは答えない。

無言でライダーを抱き上げ、俺に背を向け歩きだす。振り返ることなく、まっすぐに常夜灯の下を抜けると、その姿は闇夜に溶けて見えなくなった。

慎二が何を考えてるかなんて、全く分からない。だけど一つ確かな事は、何があろうとも、あいつが俺の、かけがえのない親友という事だ。

だからこそ、あいつが悪い事をしたなら、殴つてでも止めよう。そう、心に誓った。

さて、帰るか。首領パッチは……いないな。先に帰ったのか？ まあ、アイツがどこに居ようが知った事では無いんだけど。

夜を歩く。

家々の灯りはとうの昔に消え、俺の吐息と足音だけが、どこか不気味に響き渡る。

こんな時間に一人で出歩くなんて、巷で噂の殺人鬼からしたら格好の餌だろうな……。

いや、そんなことよりも心配すべき事態があるだろう。俺は聖杯戦争の参加者なのだから、味方も首領パッチも居ないこの状況で敵サーヴァントに出くわしたら——

「御機嫌よう、坊や」

空。月が暗雲に隠れ、夜の闇に埋もれたその場所に、紫紺の布が浮いていた。

よく見ればそれは、ローブに身を包んだ人影。空中に浮かぶという異様な姿と、怪しげな錫杖とが相まって、魔術師然とした雰囲気醸成されていた。

しやらり、と鈴の付いた錫杖を鳴らし。異様な風体の女は、悠然と俺を見下ろし微笑

む。

「サーヴァントも連れずに一人で出歩くなんて、自分の力に自信でもあるのかしら？」
まずい。マスターではサーヴァントに太刀打ち出来ない。

何とかこの場を凌がなければ……。

そうだ、話し合いだ。取り敢えず、何か言葉を発しなければ——！

「あ、う……………」

頭が真っ白になる。嫌に口の中が乾く。

——目の前の存在が放つドロドロとした死の恐怖が、口を開くことさえ許さない。

違う。言葉を発せないのは恐怖のせいじゃない。これは、魔術、か……？

「ふふふ。お休みなさい、坊や」

——何だろう、急に、瞼が重く——

「士郎、おかえ——」

「こんばんは、バーサーカーのマスター」

扉の前にはキャスターが悠然と佇んでいた。まるで世間話でもしに来たかの様に、柔らかな雰囲気だ。

「っ!! バーサーカー!!!」

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■!!!」

少女が声を発すると同時に、霊体化を解いた狂戦士がキャスターを一刀両断する。

しかし——

「……あら、挨拶もなしに攻撃だなんて、野蛮なこと。けれど、残念ね。これは只の『人形』。私はメツセージを伝えるに來ただけよ。よく聞きなさい、バーサーカーのマスター、そして、首領。パッチ」

「ん？ あ、バツコーブ付き女だ」

「バツ……? ゴホン。よく聞きなさい。あなたの同盟者である衛宮士郎の身は今、私の手元にあります」

「へー。そーなんだー。すごーい」

「……返還交渉を望むのならば、柳洞寺までいらつしやい。今から二刻経つ前に来なければ、彼を生きたまま魔術礼装にするわ」

「魔術礼装って何？ カレスコ？」

「……………」

「おい無視すんな」

「……………」

首領パッチのダル絡みを華麗にスルーした後、キャスターの体は無数の蝶となつて、闇夜の空へと散つていった。

「……消えたわね。首領パッチ、一緒にシロウを助けに行かなきゃ!!」

「頑張れー。オレにはカンケーないけどー。じゃあの」

「え!! いや、首領パッチの——行っちゃった……。まあいいわ、ワタシだけでもキャスターがどれだけ強いかなんて知らないけど、バーサーカーは最強なんだから——

——!!」

7. 首領パッチ V S アサシン

——闇を駆ける。

寝静まった町並みを、オレンジ色の素敵なサムシングが駆け抜けて行く。向かう先はただ一つ、商店街近くの公園である。

首領パッチは今、猛烈にブランコでブラブラしたかった。先程は、間違えてブランコに乗ってしまったので、しっかりブランコでブラブラしなければ気が済まなかったのである。

まあ、公園に行くついでに士郎へ会いに行こうかしらん、とも思っていたりいなかったりした。

そんなこんなで公園に着き、リストラされ、ブランコで項垂れていた元〇×食品第三営業部係長・田中宏と小一時間ほど話し込んだ後、暇だから、という事で柳洞寺にて美女と戯れている士郎を邪魔しに向かったのであった。

首領パッチを待ち受けていたもの、

それは、平静の柳洞寺とは別物と化していた。

空気が淀んでいる。

風が怜悧さを増している。

生命の息吹が感じられない。

——ここは、全ての命潰える場所、死の魔女が住まう氷獄であった。

ちなみに首領パッチの初見での感想は、

「階段長つ！ これ登んのかよ面倒クセエ!!」

であった。緊張感ゼロである。

「こうなったらアレを使うか……」

そう言つて、何でも入りそうな四次元風の白いポケットをまさぐる。

「あつたぜ！ タラリラツタラ〜♪ パチコプター（裏声）

説明しよう。パチコプターとは、タケコプターのパチモンである」

誰も聞いていないのに律義に説明する首領パッチ。ソレを頭に付け、階段の上を飛ぶ。

「ブーーーーー」

巨大なハエが飛び回っているような不快音が反響し、山がざわざわと蠢きだす。

途中までは順調に飛んでいたのだが、中腹辺りで、首領パッチが唐突に喚き散らし始めた。

「痛で！ トゲが！ トゲがもげりゆううううう！！」

何故そんな不安定極まりない所に付けたのか。そのまま首領パッチが空中で悪戦苦闘していると、

「あつ！！ 電池切れたアアアアア！！」

頂上。

あと僅かで山門に至るといふ時に、哀れな馬鹿が地に堕ちた。

「あああああああああああああぐげぶつ！！！！」

石段に激突し、鮮血を撒き散らす首領パッチ。

——その様を、地に胡坐をかきながら、ぼんやりと眺める男がいた。

さらりとした自然体。浮世離れた紺の和装。口元には、他意のない微笑を湛えていた。

「今宵は月が、格別に美しい。かぐや姫でも降りてくるやもと思うたが、いやはや、魍魎の類が落ちてこようとは」

男が、ゆつくりと腰を上げる。

深夜4時前後に、何の脈絡もなくオレンジ色の不思議なナニカが現れたにも拘らず、平静さを崩さない。それだけで、男の人となり、そして戦い方が見て取れる。

「ん？ 何だこのオッサン」

「アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎」

飄々と、短歌を詠み上げるかのように、その男は自らの名を口にした。

「ふーん。知らね」

ハナクソをホジホジしながらそう吐き捨てる首領パッチ。

「……………」

滅多な事では動じないアサシンも、この時ばかりは少し傷付いた。

普通ならばアサシンの言動は異常である。

サーヴァントとは己の正体を隠すもの。真名が露呈すれば敵に手の内や弱点が知られてしまう事となる。

にも拘らず、それを自ら、堂々と告げるサーヴァントが何処にいる——！！

まあ、その程度の異常など、歩く異常である首領パッチの前では誤差の範疇でしか無

いのだが。

「俺は首領パッチ」

普通に名乗り返しちやうし。

「名乗り返さずともよ——名乗ってしもうたか……」

何とも言えない哀愁を漂わせながら、セイバーと同じようには行かぬか、と内心落胆するアサシン。

先日、セイバーに同じ事をした時には、中々どうして愉快的な反応を見せてくれたのだが、と。

「……まあよい。名乗りあつただけで互いを分かり合えるとは思えぬ。——この刀で、お主が何者なのかを知るとしよう」

かつん、と。

色々と調子は狂わされたがあくまで優雅に石段を下り、首領パッチと対峙するアサシン。

「いざ、参るー！」

「刀なつが！ その長さいらねえだろwwwバカみてえwwwわざわざ刀長くするくらいなら槍使えばよくね？」

「……………」

アサシンの額に青筋が走る。

当然だ。男の人生は、常にこの刀と共にあつた。否、この刀こそ、男の人生そのものであつた。

幼き日に、名も知らぬ剣聖から譲り受けた愛刀。己が剣術も、人生も、唯一無二の絶

技も、全て、この刀あつての物である。

それを愚弄するとは、「槍で良いではないか」とは、

己の生き様を——

「隙あり!!」

首領。パッチがアサシンに向けて拳銃を発砲した。

完璧に意表を突いた一発、クイツクドロウとしては最高峰の一撃を——アサシンは苦もなく断ち斬つて見せた。

「舐めるなよ、妖風情が」

修羅の如き眼光が、男の「誇り」を愚弄した道化に突き刺さる。

「クソつ、これならばどうだ!! 奥義『マシンガンに頼ります??』」
「!!!」

おいそれ他人の技だろ。

首領。パッチが何処からとも無く取り出したのは、片手自動小銃『キャリコム950』。本体重量は2キロ程であるにも関わらず、最大100発の銃弾を装填可能な代物である。

「うらあああ!!」

首領。パッチが引き金を引くと同時、鉛の豪雨が、侍を貫かんと降り注ぐ。

初速350 m/sの銃弾が連続して数十発、常人ならばなす術なく一瞬で蜂の巣と

化す。

しかし――

「はあつ――!!」

アサシンは神速の剣舞でもって数多の弾丸、その全てを斬り、弾き、打ち落として見せた。

まともに振るう事さえ困難な長刀でもって軽やかに、優雅に。

しなやかな剣線は、首領パッチの攻撃を悉く受け流し、そうして――

唐突に、鉛の雨が止む。引き金を引く音だけが、夜の森に虚しく木霊する。

「うへ!! 弾詰まり ジャムった!!」

キャリコM360が持つ弱点の一つ、給弾機構の欠陥である。

落ちていて対処すれば再び射撃は可能だがしかし、アサシンが、その隙を見逃すはずがなかった。

「フツ――」

嘲笑を浮かべ、銀の光を奔らせるアサシン。

見惚れる程美しい剣閃が、見届ける事が困難な程の速度で振るわれる。

「ちよまつギイやああああああ!!」

銀の軌跡が、首領パッチの銃を持つ手を流れるように切り落とす。

「豆粒を飛ばすだけで、この佐々木小次郎を殺せるなどと思うたか。たわけ」

アサシンは汚物に向けるような目で、痛みにも項垂れる首領パッチを見下した。

次なる一閃を受ける前に、ぐるぐる転がることでアサシンと距離を取る首領パッチ。

よろよろと立ち上がり、即座に現状を把握する。

(近接戦闘ではこちらが圧倒的に不利っ！ キャリコは喪失、コンテンドーは再装填が必要……残る武装は首領パッチソード一本と、ボンタン180個)

……ボンタン180個？ というかそれは武装なのか？

首領パッチは何を思ったのか。足元にダンボール山盛りのボンタンをドサつと置き、それらをアサシンに向かってやたらめつたら投げつけ始めた。

「うおおおおボンタンボンタンボンタンボンタンボンタンボンタンボンタンボンタン!!!!」

これらのボンタンは別になんの変哲もない、少し柔らかめな只のボンタンである。

「!! 気でも狂うたか!」

アサシンは仕方なく、飛来するボンタンを切り刻む。すると、まあ当然といえれば当然なのだが、大量の果汁が飛び散った。そして、その一部が——

「ぬをつ!!」

アサシンの目に入った。ちよつとの間目を開けられない、地味に鬱陶しい痛みがアサシンを襲う。

「今だ!! 死ねえええええ!!」

首領。パツチがネギを大上段に構え、アサシンに迫る。

「くっ、見えずとも!! 秘劍——」

両者の間合いは、約三メートル。無形を旨としてきたアサシンが、今宵始めて『構え』を取った。

——その、瞬間、

世界が、歪んだ。

「——”燕返し”」

ネギがアサシンに振り下ろされる刹那、首領。パツチへと、三つの刃が全^くの同^時に^一にか^たつた。

「え!! ぎいやあああ!!」

為す術なく切り刻まれ、ボタボタと地に落ちる首領。パツチ。

燕返し。彼の愛用する長刀、磨き抜かれ、神の域に到達した超絶技巧、そして音速を凌駕した圧倒的な刀速により、人の領域を超えた第二魔法『多重次元屈折現象』を引き起こし、対象を囲む死の牢獄を作り上げる必殺剣である。

近接戦闘においてこの技を受ければ生存は絶望的であり、アサシンが生前この技をもつて殺せなかった相手など一人も居なかった。

此度の聖杯戦争においても、この技を完璧に防御出来たのはランサーのみである。

伝説の騎士王たるセイバーでさえも対処法を編み出せず、階段を転げ落ちる事で辛うじて回避出来ただけであり、その後撤退を余儀なくされている。

神域の技をもつて首領パッチを切り刻んだアサシン。しかし、彼の顔に余裕はなく、額には冷や汗が浮かんでいた。

「……………危うかった。ともすれば、命を落としていたのは拙者だったやもしれぬ……………」

あの瞬間、首領パッチのネギはアサシンの頭髮に触れていた。自らの技を先に放てたのはただの僥倖に過ぎないとアサシンは思い、その事に戦慄した。

服の袖で目元を拭い、ゆっくりと瞼を開けると、地面に転がるころてんの破片に目を向ける。

(……………ん?)

そう、ところてんである。オレンジ色などとは程遠い、半透明なプルプルしたアレである。

よく見ると、ソレには目と口があり、うわ言のように何かをブツブツと呟いていた。

「首領パッチ……マジ許さねえからな……てか、ここ何処だよ……」

「これは——」

戸惑い、一瞬思考停止状態になるアサシン。彼の思考を引き戻したのは——

「はーっはっはっはっはー!」

森の中に響き渡る、鬱陶しい高笑いであった。

声のする方に目を向けるアサシン。そこには、木の幹の上で、両手を腰に当てて尊大に立つ、首領パッチの姿があつた。

「なー! いつの間に!!」

「すり替えておいたのさー!」

アサシンをビシツと指差し、そう言い放つ首領パッチ。

……いや無理があるだろ。そもそも何処からとて天の助連れて来たんだよ。

そういう事を考えたら負けである。

「さあーて、反撃開始じゃボケえ!!」

そう言つて何処からか取り出したのは、ドス黒いボディを持つ、超巨大なガドリングガンだった。

「……ふつ、またもや種子島か。どれだけ凶体が大きかろうと、豆粒を出す事に変わりはあるまい!」

「文明の利器舐めんなアアア！　いくぜつ！！」

首領パッチが、引き金を引く。

静寂を劈く爆音と共に、鋼鉄の暴龍が火を噴いた。

「AAAAAAAAARRRRRRRTTTTTTHHHUUUUURRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRR!!!」

「無駄な事を！　全て叩き斬ってくれる！！」

アサシンが、またも数多の弾丸を、切り、弾き——刀身が千切れ飛び、アサ

シンの身体に無数の孔が穿たれた。

「……………コプっ！！」

吐血と共に、全身から血が噴き出す。

ばかな、とアサシンは驚愕し、何が起こったのか全く把握出来なかった。

それもそのはず、サーヴァントが与えられる現世の知識は、『一般常識』だけである。ゆえに、重戦車さえ一瞬にして鉄屑と化す大口径重機関砲の存在など、知るはずもないのだ。

『GAU-8　アヴェンジャー』首領パッチの使用したガトリングガン の名称である。

全長6.4m、総重量1830kg。

一分間に3900発もの弾丸を発射可能。使用弾口径は30mm。これは日本の警察が使用している拳銃の口径より3倍以上大きい。

しかし、大口徑故に反動が凄まじい為個人使用など到底不可能であり、通常は戦闘機などに搭載した上で運用する。

その威力たるや、一キ口先にある装甲でさえ厚さ4センチまでなら貫通できる程である。

首領パッチとアサシンとの距離は約20メートル。悲しいかな、アサシンの愛刀程度なら容易に貫通できるのだ。

『銃は剣よりも強し』ってな!! 棒切れ振り回す原始人の時代は終わったんだよ!!」
食物振り回すチンパンジー以下の奴が何を言っているのだろうか。

「……………」

アサシンは、無残な姿となった愛刀に目を落とし、ポツリと、

「フツ。時代、か…………」

そう呟き、何処か物悲しい顔を浮かべながら、仰向けに崩れ落ちた。

真紅の円が、男を中心に広がっていき、地の色を塗り替えて行く。

もし、セイバーとして召喚されていたなら。

もし、自らの愛刀を只の刀としてでは無く、宝具『長物干し竿』として使っていたなら。

きっと、このような終わり方にはならなかっただろう。

だが、全ては仮定でしかない。稀代の剣豪、佐々木小次郎は、バカに銃で撃たれて死んだ。結果としてはそれだけである。

「じゃーなーばいびー」

首領パッチはそう言つてそそくさと山門をくぐり抜けていった。

「……そうよな、所詮拙者は、古き時代の遺物よな——」

アサシンの目端から一粒の雫が流れ落ちた。如何ともし難い、男の『無念』が、其処にはあった。

「——何者か。用があるなら早くするが良い」

アサシンが、虚空に声を掛ける。

それに呼応するかのように、すると、数多の黒い点が収束する。寄り合わさった影は、混ざり、固まり、ヒトの形へと変貌していく。

そうして出来上がった翁の姿をした何が、アサシンに語りかけた。

「カカ。なに、お主の霊基を使わせて頂こうと思うてな」

そう言つて、ブツブツを呪文を唱え始める。

「——？ 何を——」

「——来たれ、闇に生きし英雄よ」

翁が、詠唱を完了する。それと同時に、アサシンの腹の中から、宵闇の衣を纏った『何か』が這い出て来た。

「ギイイイイイ！！」

「おお、上手くいったわい」

老人が陰惨に笑う。その様を横目で見やりながら、しかしアサシンは驚く事もなく、（ああ、拙者の腹から出て来たのだ。碌なものではあるまい）

そんな皮肉を、内心で吐いた。

（最早拙者には関係のない事だがな……フツ、何と淀みなき月夜か。これを見ながら逝けるとは、僥倖よな——）

そうして佐々木小次郎は、ゆっくりと、地を這う闇に呑み込まれていった。

『タリナイ タリナイ タリナイ タリナイ タリナイ』

『満つる時は、幾許も無し』

8. 神代の魔術師

「目覚めなさい」

耳朶を舐める艶やかな囁き。朦朧としていた意識が、確かな形を持ち始める。

ゆっくりと瞼を開く。暗がりで見え辛いのが、ここは——

「柳洞寺、か……?」

「ええ。ようこそ、私の“神殿”へ」

「!!」

その声で、全身の毛が逆立つ。命の危機を感じ、急激に鼓動が早まっていく。

そうだ。俺はついさつき、この声の主に出くわし、そのまま意識を失ったんだ。

どうする。今手元に武器はない。いや、そもそも持っていたところで太刀打ちなんて

出来ないだろう。

助けを求めようにも、近くに遠坂もセイバーも居ない。首領パッチが居ないのは、

まあ、いつものことか。

「あらあら、そう警戒しないで欲しいわね。私は別に、貴方を殺すつもりなんて無いのだ

から」

どこからともなく響く、妖艶さに満ちた女の声。暗がりの中、それは 徐々に姿を現した。

俺のすぐ近くの地面より、ゆらりと湧き上がるように人影が立ち上る。霞みがかつたようなその影は、やがて人の形へと外観を変えた。

紫紺のローブに身を包む、人ならざる異質な存在——

「キャスター、か？」

「ええ。まあ、見たら分かるでしょうけど」

そう、自らのクラスを明かすキャスター。

奴の目的が全くわからない。俺を殺す気は無い、だって？　そもそもなんでこんな所に俺を連れて来たんだ……？

「……殺すつもりは無いって、どういう事だ」

フードの影に隠れている目を睨みつけ、威嚇するかのように問う。

「フフ、怯える子猫のようね。必死になって、自分を大きく見せようとして……。慣れない事はしない方がいいわよ、『坊や』」

「っ!!」

看破された。いや、そもそも武器一つ持たない上に半人前の魔術師でしかない俺の威嚇なんて、何の意味も為さないだろう。

狼狽える俺の姿に冷笑を零しながら、キャスターが言葉が続ける。

「フフフ。言葉通りの意味よ。これからマスターでもなんでもなくなる一般人に興味は無い。私は、貴方のサーヴァントを『頂く』為に、貴方をここまで運んで来たのだから」
「……………え？」

サーヴァントを、頂く？

「どういう、意味だ…………？」

「というか首領バッチなんて要るか？　引き取ってくれるなら金払ってでも引き取ってもらいたい位だけど」

「……………コホン。確かに、貴方のサーヴァントは御し難い。けれど、それを差し引いても余りある程の戦闘能力が、彼にはあるわ」

「戦闘能力…………？」

「いや、どう考えても差し引き切れないと思うのだが。御し難いとかそういうレベルじゃないんだよ…………アイツは…………。」

「……………あら、もう来たようね」

「そう言って、山門の方に目をやるキャスター。」

直後、耳を劈くような爆音が、山の中に鳴り響いた。

「銃声?!」

「……驚いたわ。アサシンをこうも容易く……やはり、私の目に狂いは無かったようね」
 そう言つて、不気味な笑声を漏らすキャスター。

数秒後に、暗闇の中でもはつきり分かるオレンジ色の物体が山門をくぐつてやつて来た。アイツ、何しに来たんだ？ 助けに来た—— 訳じゃないな。絶対に。

「どうしたんだよ。首領パツ——」

「士郎つつつつ！ 誰よそのBB A!! ワタシという女がありながら!!」

「え？ ええええええ!!」

まるで愛する夫の浮気現場を目撃した中年団地妻の如く怒り狂う首領パツチ。ご丁寧に絶妙なケバさの化粧まで施してある。

「どういうことなの!! 何か言いなさいよ!!!」

「ぐえっ」

おれの首を両手で絞めつけながら、前後へと激しく揺らす。

「ちよ、死ぬ……、いや、誤解だつて。そもそもなんで俺とお前が愛し合つてる事が前提なんだよ……」

「ワタシとは遊びだったの!!」

何故そうなる。

「あんな女のどこがいいのよ！ どうせ旦那の短小早漏○○○に満足出来ず、男子○校

生の極太○○○に欲情した欲求不満淫乱外人団地妻なんですよ!!! シロウとの○○○で○○○拵けて『もうあの人の○○○じゃ満足出来ないのおおお!!! んほおおお!!!』とか言っておねだりしてたんでしょ!!! この売女!! 年増!!! ガバガバ○○○!!!」

絶妙に腹立つ甲高い声でキャスターを罵る首領。パツチ。完全に昼ドラのそれである。なんでコイツは毎度毎度敵のサーヴァントを怒らせるんだ? キャスターの方を見ると、うへあ……かなり頭に来てらっしやる……。ローブの下から覗く顔が真っ赤になっていた。

「……キャスター、首領。パツチが欲しいんだよな。どうぞ」

俺に出来る最大限のスマイルを浮かべながら、首領。パツチをキャスターへと突き出す。

……さて、首領。パツチが殺されている内に逃げようかな。

「やーい、お前の旦那はイ・ン・ポ! 宗一郎は短く小!」

キャスターの頭から、ブチツ、という嫌な音が聞こえた。ああ、不味い……!

「……」まで怒りを覚えたのは生まれて初めてよ。いいでしょう、貴方には少々、躰

“が要るようね——!”

キャスターが、ふわり、と宙へ舞い上がる。同時に、大気に充ち満ちている濃密な魔力が、キャスターの下へと寄り集まっていく。

右手に顕現させたるは、妖気を纏った古の錫杖。その杖先が首領パッチを指した後……首領パッチを取り巻くように、幾つもの魔方陣が現れた。

「お前の母ちゃんデ〜ベツ……………やっべえ」

キャスターが一瞬にして展開して見せた、闇に光る紫光の紋章群。その一つ一つに込められた魔力は、並の魔術師十人の総力に匹敵しているだろう。あんなもの、一つとてまともに喰らえば消し炭にされる。

結構呑気にしていた首領パッチも自らに砲門を向ける数十の大魔方陣にはビビつたらしい。生まれたての小鹿のようにブルブルと震えはじめた。

「…………どつ、どうすれば命だけは助けてくれる!! 金か! 金を払えばいいのか!! 幾ら欲しい!!」

金持つてるタイプのやられ役悪党Bみたいなセリフを吐く首領パッチ。しかしキャスターは、それに応える事なく、無情にも杖を振り下ろした。うん、まあそうだよな。

「あの目はっ! 養豚場に居る豚を見るかのような目だッ! 『可哀想だけど殺され—

——ギィヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

良く分からない事を口走った後、首領パッチは地を抉る爆炎に飲み込まれた。

黒煙が風に流された後、キャスターの魔術によって穿たれた大穴から首領パッチが這

い上がつて来た。顔面は所々腫れあがり、煤だらけで齒も何本か欠け、見るからに分かりやすくボロボロだった。

「……何か言う事はあるかしら？」

「申し訳ございませんでした」

即答だった。土下座しながら。それは、普段の粗野な振る舞いからは想像もつかない程、淀みなく美しい、見事な土下座であった。

まあ、首領パッチにはいい葉になっただろう。多分。これで懲りて少しは大人しくなってくれるといいんだけど……なる訳ないよな、うん。

「……よろしい。では誓いなさい、私の僕となる事を。私の手足となる事を……」

キャスターが、首領パッチの目の前へと降り立つ。音一つ立てず、土煙すら起こさずに。

「今宵、この時より、汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に——」

何かの呪文を紡ぎながら、キャスターはローブの下から一振りの短刀を取り出す。武器として見るには余りにも歪な形状をしたそれは——

「げ、身体が動かねえ！」

何らかの魔術で固定されているのか、身動き一つとれない首領パッチ。その無防備な

頭に、妖光の刃が振り下ろされる。短刀と首領パッチが触れ合う刹那、キャスターのローブの中で、静かに真名が紡がれた。

「――^{フルフルブレイカー}破戒すべき全ての符」

トスつと、首領パッチの頭に短刀が突き刺さり、

「あふん?!」

首領パッチが気持ち悪い声を出す。キャスターが短刀を引き抜くと、それなりの血が吹き出した。

「グバっ!!」

……………それだけだった。

「……………?」

首を傾げるキャスター。もう一度短刀を振り上げ、首領パッチの脳天に突き刺す。さつきよりも深めに。

「ふあん?!」

引き抜く。

「ホデユアア!!」

血の噴水が二つに増えた。それだけだった。

「?????」

ざつきよりも深く首を傾げるキャスター。手に持つ短刀を凝視して、異常が無いかどうか確認し始める。先端を指先でつついたり、側面を指でなぞったりするが、異常は無いようだ。

「……大丈夫か?」

気を遣って声を掛けてやる。いや、キャスターが戸惑うのも無理はない。普通なら彼女の宝具を刺されて、何も起きない筈が無いのだから。

破戒すべき全ての符。目視で読み取った構造、構成材質、創造理念などから判明した特性は、『魔術の初期化』。彼女の持つ短刀は、魔力で強化された物体、契約によって繋がった関係、魔力によって生み出された生命を無に帰す最強の対魔術宝具だった。

聖杯戦争がマスターとサーヴァントとの『契約』を大前提としている以上、それを根本から覆せるキャスターの宝具はその名の通り反則級の強さを有している、いや、最早『反則そのもの』と言えるだろう。

………何故か首領パッチには効かなかったけど。マジで何も起こらなかったけど。

どうして効かないのか、なんて俺にはさっぱり分からないし、キャスターも事態が飲

み込めず呆然としてる。けど、まあそりやそうだよな、と心の何処かで納得した俺がいる。首領。パツチだし。首領。パツチだからな。

俺の掛けた言葉に反応しないキャスター。ブツブツと何かを呟いているが、声が小さすぎてよく聞こえない。

「契約に魔術が関係していない………？ 私の宝具は魔術そのものには干渉出来ても魔術によって引き起こされた結果そのものには干渉できない。つまり———けど、それじゃあ一体」

「……キャスター？」

再び声をかけるが、やはり答ええない。

うん。もう帰っていいかな。そもそも何でキャスターに気を遣おうなんて思ったんだろう。別に義理なんてないのに。よし、足早に我が家へ帰るとしよう。

「首領。パツチ、帰———」

「隙ありいいいいいい!!!」

首領。パツチがキャスターに向けてネギを振りかぶった。何故そこで喧嘩を吹っ掛ける!!

「ちよ、何やってんだよ!!!」

しかし、横薙ぎに振るわれたネギが当たった瞬間、キャスターの体が霞の如く消え

去った。

「あり？」

「——残念ね。それは只の『影』よ」

遠く離れた本堂の前に、彼女は佇んでいた。まるで、最初からそこにいたかのように。彼女が、徐に左手を俺達へ向けて突き出す。それに呼応して、新たに十数門の魔方阵が中空より出現し、俺と首領パッチへ照準を向ける。一つ一つの大きさが先程のものと比べて段違いに大きいそれは、含有する魔力量も数十倍に跳ね上がっていた。

「私の支配下に置けないのであれば、貴方達を生かしておく必要性は無くなったわ。未熟なマスターともども、不確定要素は早々に消してしましましょう。——さようなら」

古の魔女が、冷酷に死の判決を下す。無力な俺に、抗う事など許される筈も無く、首領パッチは、

「ほな、ささいなら〜」

いつの間にか俺を置いて山門の手前まで逃げ去っていた。いや散々状況悪化させておいて自分だけトonzラかよ!!

しかしキャスターが大人しく逃がす筈も無く、

キャスターが魔術を放った瞬間、バーサーカーが大地を鳴動させながら突貫した。前後左右、あらゆる角度から放たれた光弾が、無防備なバーサーカーへと襲いかかる。

しかし、それらは一つとしてバーサーカーに届くことは無く、その身に纏う『何か』によつて弾かれ、虚しく火花を散らす。

巨人の進撃は、止まらない。

「■■■■■■■■■■!!!」

「くっ!!」

キャスターの顔に動揺の色が浮かぶ。自らの攻撃が全く効かなかったのだ、無理もない。

近接戦闘になればキャスターに勝ち目はない。浮き上がる事でバーサーカーとの距離をとり、新たな魔方陣を自らの手前に展開する。

「Μεγ?λο φωξ——!」

バーサーカーの体軀さえも凌駕する、超巨大な魔方陣。そこに籠められている魔力は、周囲の景色を歪ませる程だ。

これだけの大魔術を一瞬で編み上げるなんて……。バーサーカーの真名を『ヘラクレス』と言った事といい、キャスターはもしかして、ギリシア神話の時代を生きた魔術師なのか？

先程バーサーカーを殺せしめた大魔術だ。しかし、それは悪手。バーサーカーに対し一度放った攻撃は、二度と効かなくなる。

「■■■■!!」

「何——ごふっ!!」

光の中から現れたバーサーカーによつて腹部を蹴り飛ばされ、天高く打ち上げられるキヤスター。バーサーカーもまた地を踏み碎いて飛び上がり、キヤスターの体を一刀両断した。

「あら、呆気ないわね」

イリヤが退屈そうにそう告げる。古の魔術師は、無惨にもその臓物を撒き散ら——
——すことなく、数多の蝶となって、月の下へ散っていった。

これは……………。

「その『影』はかなり頑丈にしたつもりなのだけど、一撃で壊すなんて。流石はヘラクレス、と言った所かしら」

境内に女の声が響き渡る。

「それにしても、不可解な能力ね。貴方が生前そんな能力を有していた記憶は無いのだ

けど……。まあ、おおよその原理は理解出来たわ。一定以上の『神秘』を有しない攻撃は一切遮断し、殺されても復活する。そして、一度受けた攻撃は二度と通じない……。有する命の数は、そうね。貴方の伝説『十二の難行』になぞらえて、十二個、と言った所かしら」

キャスターの推測に、顔を顰めるイリヤ。まさか、キャスターの推測は全て的中しているというのか。真名が分かっているとはいえ、正体不明の宝具の性質をこの短時間で完璧に暴くとは……。

「けど、それが分かったからって、アナタがバーサーカーには敵わない事には変わりはないわ!! 隠れても無駄よ! ここに拠点を構えているのは分かっているんだから、見つかるまでここを壊し尽くしてやるわ!! 暴れ狂いなさい、バーサーカー!!!」

「■■■■■■■■■■!!!」

「あら、お嬢さん。まさか貴女、私が見える魔術の内、ヘラクレスを殺し得る魔術がたったの十二種類以下だとも思っているのかしら?」

……今、キャスターは何と言った? さつきバーサーカーを殺した魔術は、セイバーの宝具程ではないが、ランサーの宝具から感じた脅威を優に超えていた。アレと同等の魔術を、キャスターは少なくとも十二種類以上使えるつての……!!

バーサーカーが威嚇のために雄叫びを上げる。だが、本体の位置が分からないこの状

況で無闇に動いたら、マスターであるイリヤを危険に晒す事になる。だから、バーサーカーはイリヤの命令を無視して、俺達の前に陣取った。

「さあ、貴方は耐えきれるかしら？ ヘラクレス——!!」

キャスターによる集中砲火が始まった。雷撃、轟炎、氷塊、猛毒、光線、ありとあらゆる魔術が、俺達に襲いかかる。バーサーカーは手に持つ斧剣と規格外の膂力でもって魔術を弾き、砕き、振り払うが、あまりの物量に対処しきれず、何度も致命傷を受けてしまう。

最早、戦いなどではない。今日の前行われているのは、姿見えぬ敵による、一方的な蹂躪だ。

いや、バーサーカーはもしかしたら、自らの身を守るだけならまだ手の打ちようはあったのかもしれない。だが、バーサーカーの後ろには、俺とイリヤがいる。防壁を展開しているとはいえ、キャスターによる猛火の前では紙切れ同然でしかないだろう。だからバーサーカーは、敵の攻撃を『躲す』という手段が取れない。背後に控える俺達を守る為に、捌き切れない攻撃は、その身で受け止めるしかないのだ。

魔術の嵐が、黒き巨人の胴を穿ち、頭を抉り、四肢を断ち切る。いかほどの英雄であ

ろうが関係ない。即死だ。しかし、巨人はそれでも尚立ち上がる。俺達の為、己が主の為に、絶望的な戦いに身を投じる。

「バーサーカー!!!」

少女が悲痛な叫び声を上げる。

「クソツ、どうすれば……………、そういえば!」

さつきから首領パッチの姿が見えない。山門の前でバーサーカーに踏みつぶされたたっぽい断末魔は聞こえたけど、今アイツは何をやってるんだ…………? 普通に考えたらとつくの昔に逃げているだろうけど、まだ近くにいたのであれば、この状況を打開できるかもしれない。

俺がそう考えた矢先、

「おーい! 士郎〜!」

首領パッチの呼ぶ声が聞こえて来た。

「首領パッチ!!! お前何やって」助けて士郎ウウウウ!!! やばいやばいやばいやばいやばい!!!」

声のする方を見ると、首領パッチが必死でキャスターの猛火から逃げ回っていた。

「ヤバいつ、死ぬつ、死ぬ!!! ひええええええ!!!」

情けなく涙と鼻水を撒き散らしながら走り回る首領パッチ。…………こんな奴に頼るの

は不本意極まりないけど、今この絶望的な状況を打開できそうなヤツは首領パッチしかない。爆音にかき消されないよう、大声で叫ぶ。

「首領パッチ!!! 何とかしてくれ!!! もうお前しか——」

「無理無理無理無理!!! つてやべえ!! また足が動かかなぎやああああああ!!!」

再び空間固定魔術の餌食となり、集中砲火をモロに喰らう首領パッチ。

「……………こんな奴に勝てる訳ないだろ……………ぐはっ」

そう言い残して地に倒れ伏し、首領パッチは力尽きた。いや、多分尽きてないけど。首領パッチは完全に戦意消失している。アテには出来ない。

一体どうすれば……。

「■■■■ッ! ……………——」

「バーサーカー!!! 立って! 立つのよ!!!」

また一つ、キャスターの魔術がバーサーカーの命を奪う。残る命のストックも、後二つしかない。

「フフ、そろそろ頃合いね。Asus?da——!」

キャスターが新たな魔術を唱える。その瞬間、前後左右、あらゆる角度から漆黒の鎖が現出し、バーサーカーに絡みつく。

「■■■■ッ! ■■■■■!!!」

バーサーカーは、その程度の拘束などものともしない。圧倒的脅力をもって、自らを縛る鎖を引き千切っていく。しかし、引き千切るその数秒間、バーサーカーは確かな隙を晒して――

「死になさい、お嬢ちゃん」

キャスターの魔術が、イリヤの防壁に直撃した。

「ツ!!!? ガフツ!」

イリヤが、吐血する。

あまりの威力。それを防ぐ為に自らの限界を超えた力を行使し、少女の華奢な体が悲鳴を上げる。

その、無惨な姿など意にも介さず、キャスターが再び魔術を放つ。直撃。防壁に深い亀裂が入る。

「コフツ……」

再び血を吐くイリヤ。そして――膝から力なく崩れ落ちた。

「イリヤ!!!」

咄嗟に抱きかかえる。同時に、防壁が消え去り、バーサーカーが活動を停止する。魔力が、もう残っていないのか。

「あらあら……。ヘラクレスがいかに強力でも、それを従えるマスターがこの程度で限

界を迎えるようじゃ、宝の持ち腐れね。安心しなさい、貴女が死んだ後は、私が効果的に運用してあげるわ。——さようなら」

キャスターが、終焉の魔術を展開する。

——俺は、何をしているんだ。こんな小さな女の子に血を吐かせて、守られて……。

男なら、守ってあげるべきじゃないのか。華奢な女の子一人守れないで、何が『正義の味方』だ。

俺は——

少女を寝かせ、キャスターの魔術に相対する。

守らなければ。イリヤを、絶対に。

けど、この体を肉壁にしたところで、二人とも死ぬだけだ。

——武器がいる。この手に、キャスターの魔術を防げる程の武器が。

武器。俺は、強化魔術の他に、もう一つだけ魔術を使える。今までは上手くいかなかったけど、今ならきつと使える。

だが、何を作り出せばいい？

セイバーの剣——駄目だ。あれ程の聖剣は、恐らくこの身に余る。

ランサーの槍——無理だ。何故か分かる。まだ俺は、剣以外の物を作り出すことは出来ない。

ならば——

「^{トレース}投影」

キャスターの魔術が迫る。駄目だ、詠唱が間に合わない——

右手には、既に『ソレ』が握られていた。

「うおおおおおおおおお」

!!!!!!!

『ソレ』は、勝手に動いているようだった。俺の体は、ただ『ソレ』に付いていくだけ。派手な火花を散らしながら、『ソレ』はキャスターの魔術を叩き潰していた。

「なっ?!? ネギ、ですって?!? そんなもので、私の魔術を……!!?」

限界を超えた俺の右腕は、骨が砕け、肉が千切れた。だけど、まだ左腕が残っている。守るんだ。絶対に。

電撃が放たれる。生物が反応する事など出来る筈が無いその攻撃を————弾き落す。

「つつ?!? これも防ぐというの?!?」

「アアアアアアッ!!!」

左腕の皮膚が焦げ、骨まで焼かれた。

けど、まだまだ。両手を使えば、まだ辛うじて握れる。腕が動かなくとも、身体が動くなら———!

轟炎が、光線が、氷塊が迫る。まだまだ。まだ、倒れる訳にはいかない!!

「こっのオオオオオオオオオオ!!!」

上半身を振りかぶって、両手に握る『ソレ』を、無理矢理叩き付ける。いや、違う。壊れた筈の両腕で、手に持つ武器に力を込められている。

「うおおおおおおりゃあああああ!!!」

凌ぎきる。凌ぎきれた。同時に、俺の中の何かが、急速に失われていくのを感じる。構わない。関係ない。この後俺がどうなったって構わない。

今、この瞬間に、全てを――

「あ――れ？」

身体が、急に言う事を聞かなくなる。立つことさえ出来ずに、前から地面に倒れ伏す。「クソッ、動けッ……！ 動いてくれ……!!」

駄目だ。俺はまだ、倒れる訳にはいかない。

けど、幾ら力を込めても、指一本さえ動いてくれない。体中が熱くなり、視界が赤く染まっていく。

「――どんな術を使ったかは知らないけど、限界が来たようね。……死になさい」
キャスターが、数十の魔方阵を展開する。バーサーカーを殺せしめた、強大な魔術を。く、そ……」

俺は、なんて無力なんだ。あの日の夜と同じ。何年たとうが、結局、俺は誰一人救う事が出来ないのか――

キャスターが錫杖を振り下ろす。死の光が、俺達を包み込む――その前に、全ての魔方阵が霧散した。

「なっ!？」

「悪いな、キャスター」

俺は知っている。この声は、この、飄々とした声は——

「テメエの相手はこのオレだ」

9. キヤスターVSランサー

身に纏うは紺の鎧。その手に握るは必殺の魔槍。神代の大魔術師を前にして堂々と立つその後ろ姿は、見紛いようもない。ケルト神話最大にして最強の英雄——ランサーだ。

「ほらよつと」

何らかの魔術か。淡い光が俺とイリヤを包み込み、傷付いた身体を癒す。動かなかつた四肢が、辛うじて動けるようになった。

「坊主の方は大丈夫そうだな。そっちの嬢ちゃんは、まだ生きてるかあ？」

「っ！ イリヤ！」

少女の身体をゆつくりと起こす。

「だい、じょうぶ……」

呼吸は弱弱しいが、命に別状は無さそうだ。けど、分からない。どうして——

「……何の用かしら？ ランサー」

苛立ちを込めてキヤスターが問う。その怒りを飄々と受け流しながら、ランサーが答える。

「ハッ、いけ好かねえマスターからの指示だ。『おやびん』のマスターが命の危機に瀕した時、全力を持って守れ』ってな」

「おやびん……？ もしかして、あそこで無様に転がってるサーヴァントの事を言っているのかしら？」

キャスターが疑問符を浮かべる。——アイツを“おやびん”何て呼ぶ人間を俺は一人しか知らない。まさか、ランサーのマスターって……!!

「つつても、アイツは別に令呪をもつて命じた訳でもねえし、あのオレンジ色のバケモノは存在自体が気に食わねえ。つつー訳で、そのマスターになつてる小僧がどうなろうが、五体満足なうちは放つておこうと思つただけだよ」

ランサーが、ちら、と真紅の瞳で俺を一瞥する。それは、あの日の夜とは全く別の、何処か、親しみを持った眼差しだった。

「女子供を守る為、命を棄てて絶対に勝てねえ敵の前に立つたあ、見上げた根性だ。その上ひよっこ魔術師の癖に、曲がりなりにもサーヴァントの攻撃を三度も防ぎやがるとはな……。女を守る為に強くなる男は、好きだぜ。つい手を貸しちまう位にはな」

なんという、自分勝手に、だけど、どこまでもサツパリとした理由だろうか。この男は、オレの事が個人的に気に入ったからという、理由にもなっていないような理由で助けてくれたのだ。

「まあ、どうでもいいわ。貴方を倒すのは少しばかり手間ですが、邪魔立てするのならば纏めて消し去るだけよ」

キャスターが、再び数多の魔方陣を展開する。十、二十……そのどれもが、バーサーカーさえ殺しうる大魔術ばかりだ。しかし、

「ハッ」

ランサーが鼻で嗤う。次の瞬間、俺達に照準を向けていた数十の魔方陣、その全てが霧散した。先程と同じく、何の前触れも無しに。

派手な爆発が起こる訳でも、魔力同士の激しい衝突が繰り返された訳でも無く、ただ、あるべきものがあるべき形に還ったような、そんな、自然な消滅。

「!! 小癩な……!」

キャスターが再び魔方陣を展開するが、何度繰り返そうとも、数を増やそうとも、やはり悉く霧散してしまう。これは――

俺は、この現象を知っている。幾度となく体験した事がある。あの蔵で毎晩、生死の境を彷徨いながら。

「魔術を……失敗しているのか? キャスターは」

「おう、ご名答。中々鋭いじゃねえか」

ランサーが嬉しそうに声を上げる。けど、キャスタークラスとしてサーヴァントにな

るほどの魔術師が、なぜこんな時に……？

「分からねえか？ 小僧。ヒントは、まあキャスターの魔方陣をよく見てみるこつたな」
よく見てみる、だって？ ランサーの言葉に従い、魔方陣を注視する。紫に光る複雑な、赤い文字が刻まれていた。

ランサーの作業なのか？ けど、何の意味が——

「おのれ……ランサー！ 私の魔方陣を『不完全なもの』にしたな！！」

「オイオイ、人聞きが悪いな。オレは出力をちよいとばかり弄ってやっただけだぜ。発動さえ出来れば物凄い魔術が放てるだろうさ。つつても、この時代においてソレが許されるかどうかは知らねえけどよ」

不完全？ 許される？ 一体何を話してるんだ……？

「——世界の修正力」

イリヤが、唐突に口を開いた。

「何が起こってるのか分かるのか？ イリヤ」

「うん。聖杯戦争で必要になるからって、おじいさまに教わったの。」

この世界には、二つの理が存在する。『神秘』と、『物理法則』だ。

現代においては物理法則が世界の中心となつてゐる為、神秘はその在り方に大きな制約^{ルール}を課されている。そこから逸脱したものは、この世界を乱すものとして、『世界』そのものから修正を受ける。

例えば魔術の失敗とは、その『結果』を生み出す代償として十分な魔力、生贄等を差し出さなかつたが故に制約^{ルール}を破つたとして『修正』される現象の事を指す。

又、強大過ぎる神秘は、物理法則が支配してゐる現世界を脅かすものとして世界から多大な修正力を受ける為、展開、維持するために強大さに比例した膨大な魔力が必要となる。

多分キャスターは、その『制約^{ルール}』を破るストレスレのところ^レで魔術を行使していた。けど、ランサーがその『ストレスレ』を意図的に超えさせた。だからキャスターの魔術は、世界からの修正を受けて、消えちやつたんだと思う」

成程。内包する神秘が極めて高い魔術を操るが故の弱点を、ランサーは突いてゐるのか。加えて、常に先手を打ててゐるのはランサーの使用する魔術の特性ゆえだろう。

キャスターの魔術は、ごく短時間とは言え『詠唱』を必要とする。それに対しランサーの使うルーン魔術は、文字を一つ浮かび上がらせるだけでいい。キャスターの詠唱速度は同じ人間とは思えない程早いが、ランサーと比べるとやはりタイムラグは発生してし

まうのだろう。

「ただ今ランサーが行っている芸当は、キャスターの行使する魔術の神秘が高い故に成立している。つまり、もしキャスターがあえて神秘の低い魔術を使ったなら——」

「時代が悪かったなあ、キャスター。この時代に呼び出されたテメエの運の悪さを呪いやがれ」

「……やるわね。けど残念、粗方貴方の弄している奇策のカラクリは分かったわ。——
——貴方、まさか私が神秘の『格』を変化させる事すら出来ないとも思っているのかしら?」

「キャスターが魔術を展開する。さつきよりも二回り程小さく、籠められている魔力も少ない。遠坂やイリヤと同じレベルだろうか。これじゃあ、ランサーの魔術が通用しない——!」

しかしランサーは、特に慌てるような事も無く、一瞬俺とイリヤに目をやる。

「まあ、だろうな……ここに居ちやマズイか。伏せてろ、坊主」

ランサーが指示と共に駆け出す。だが、遅かった。防御も何もしていない無防備な体に、キャスターの放った魔力弾が炸裂する。

「ランサー!!!」

「フフフ。中々面白かったわ、ランサー。けど、最後は惨めだったわね。それこそ、打ち

捨てられた駄犬みたいに」

キャスターが、勝ち誇るようにそう嘲る。

「駄犬と言ったな、キャスター」

ランサーが、粉塵の中からその姿を現す。キャスターの攻撃をその身に受けたにも拘らず、その体には傷一つ付いていない。あの日の夜と同じく。

「何っ!」

キャスターが、驚きの声を上げる。

「いやまあ、『ピチピチもっこり青タイツ』だの『ゲイ♂ボルグ』だのと比べれば可愛く思えちまうんだけどよ……」

対照的に、ランサーは落ち着き払った声で言葉が続ける。……いや、その節は俺のバカサーヴァントがご迷惑をお掛けしました……。

「……ヘラクレスと同じく、貴方も何らかの概念防御を有しているのかしら?」

「ご名答、『対魔力』ってヤツさ。いやあ、便利な能力だなあオイ。サーヴァントになつてから色々と出来ねえ事が増えちまったが、いい事もあるモンだ」

対魔力。遠坂が言っていた。セイバー、ランサー、アーチャーの三騎士は、一定以下の魔術を無効化するスキル、『対魔力』を有していると。ランサーに対し、生半可な魔術

は意味を為さない。生半可ではない魔術は、世界の修正力を利用した技で掻き消される。ランサーは、まさしくキャスターの天敵だった。

「それより、キャスター。魔術の失敗ってのはその規模がデカイ程術者本人が受ける反動もデカイと思うんだが……テメエ、今相当やせ我慢してるだろ？ 魔力も無駄に使い過ぎだ」

「っ！ ……そういう貴方だって、魔力消費や反動は相当なものでしょう。それも、キャスターではないランサーの体には」

「いやあ、全然。魔力に関しちゃテメエが境内一杯に溜め込んだモンを使わせて貰ってるし、そもそも今オレは子供のお遊びみてえな魔術しか使ってるねえからな。んで、テメエの魔術と違ってオレの魔術は文字そのものが力を持つてるからオレ自身とは独立してる。反動なんてあるはずがねえ」

「くっ……おのれ！ 貴方が用いている魔術、それはかの大神オーデインが創りし『原初のルーン』でしょう！ その偉大なる魔術を斯様に姑息な方法でもって用いるのですか！ 魔術師としての誇りは無いのかしら!!」

キャスターが激情のままにランサーを糾弾する。しかし、ランサーはそんな言葉などどこ吹く風。あつけらかんと、

「ねえな、別に。オレはただの『戦士』だ」

そう答えた。

「何だと……!?」

「……いや、オレだつて出来る事なら真正面から魔術でドンパチやりたいぜ？ 楽しめそうだしな。けど、悪いがオレのマスターは魔力が貧弱でねえ。加えて、ランサーになるにあたつて元々持つた魔術回路が半分程消されちまつてるんだ。仮にマスターを魔力が潤沢な奴に変えたとしても、大した魔術は使えねえだろうさ」

……つまり、生前のランサーはあの神がかつた槍術だけでなく、キヤスターと撃ち合えるほどの大魔術をも行使出来たという事なのか。日本では余り知られていないけど、ランサーつて実はとんでもない英雄なんじゃないのか……？

「———そう」

ランサーの返答を受け、キヤスターの声音が、冷酷なものに変わる。

「いいでしょう。ならば、出し惜しみせず、全力をもつて貴方達の全てを消し去りましょう———」

夜が明け、朝になった。

いや、違う。世界は未だ夜のままだ。けれど今、この場所だけは、昼間と変わらぬ明

るさを持つていた。

天を仰ぎ見る。太陽に代わり俺達を照らすのは——空を覆い尽くす、幾千もの魔方阵だった。

「な……………」

「え……………」

絶句する。現代の魔術師を尺度にするのも莫迦らしいほどの、圧倒的な魔術行使。

これが、キャスターの本気。人の力など及ばぬ、天変地異の具現化。

最早、神にも等しい所業。戦う、なんて次元じゃない。抗う、なんて出来はしない。身体が、イリヤを抱えて勝手に蹲っていた。せめて、この子だけは——

「嬢ちゃん!!! 令呪を使ってバーサーカーの拘束を解け!! んで防御に専念させてじつとしてろ!!!」

ランサーの檄が飛ぶ。その声で、俺とイリヤの止まっていた思考が動き出す。

「ハッ! 面白くなって来やがったぜ!!!」

そう言うと、懐から小袋を取り出し、中身を地面にぶちまけた。あれは、宝石だろうか。それら一つ一つが発光し、鼠のように素早く地面を這いずり回り始める。同時に、先程の技を使い、次々と魔術で埋まった空に大穴を空けていく。消し切れなかった魔術が降り注ぐが、

「よつと!!」
 「!!!!!!」

再起動したバーサーカーが斧剣でもつて弾き、ランサーは軽やかに回避する。

「?λ α μ α ς ς Σ κ ο π ο β ο λ λ !!!」

キャスターの爆撃は、スコールのように絶え間なく繰り出されていく。神罰に等しい大魔術を、予備動作も、長時間に渡る詠唱も、宝具の発動すら無しに行使し、大地を紙切れのように吹き飛ばしていくキャスターは、現代の魔術師が何百人束になろうが足元にも及ばない、神話の魔女そのものだった。

——このままじゃ、ジリ貧だ。

ランサーの技によってキャスターの魔術の大半が無効化されているとはいえ、処理しきれない物だけでも凌ぎきるのはギリギリだ。未だにキャスターの位置は分からないし、このままでは物量差で押し切られてしまう。

「……負けないで、バーサーカー……!!」

イリヤが、震える声で自らのサーヴァントを鼓舞する。その言葉に、ランサーが応える。

「ハハッ、そんな悲しい声出すなよ嬢ちゃん、心配すんなって。——さて、そろそろ見つかっただろ」

「え？」

ランサーがそう言うと、境内の至る所で一斉に爆発が起きた。

「くっ!! ……小賢しい真似を！」

『上でド派手な事をして注意を逸らし、足下に仕掛けた罠に嵌める』なんていう素人戦法に引つ掛かるのは、余程の間抜けかバカだけだ。罠使うならもっと上手くやれよ、キャスター」

どうやら先程ばら撒いた宝石には、探知系の魔術が掛けられていたようだ。そして『罠』というのは、さつきから首領パッチが何度も引つ掛かっている空間固定魔術の事だろう。境内中に張り巡らされたそれらを、ランサーは即座に無効化したのか。そして、自由に動き回れるようにしたという事は――

「うし、そろそろ終わらせるとするか」

ランサーが、音すら置き去りにする速度で飛び出した。キャスターはその姿を捉えきれないのか、今までの集中攻撃を、狙いを放棄した絨毯爆撃に切り替える。しかしランサーは必要最低限の魔術のみ無効化し、その猛攻をいとも容易く掻い潜っていく。

攻撃に指向性が無くなったことで俺達への攻撃も激しさが衰え、バーサーカーも俺達を守る事が容易くなった。

だが、罠を全て無効化したとはいえ、キャスターの姿は依然行方知れずのままだ。一

体ランサーは何処へ向かって――

直後、山門の付近で巨大な火柱が上がった。そこには、

「?μννα!」

防御障壁で身を守る、今までその実体を表す事の無かったキャスターの姿があった。

「この程度の魔術――」

「動くな」

「ッ!?!」

そしてキャスターの隣には――一瞬にして間合いを詰めた、ランサーが立っていた。魔槍の穂先を突き付けられ、その場で硬直するキャスター。

「バ、馬鹿な、どうやって……。私の認識阻害魔術は完璧だった筈……」

「ハッ、山門の近くに罠を張り過ぎだ。それも、仕留める類のモンじゃなく、動きを止める類のモンばかりな」

……確かに、さつきから首領バッチが何度も罠に嵌っているが、直接攻撃を加えるものは一つも無かった。そして、アイツがさつき走り回っていたのは……山門付近だ。

「バーサーカーの戦闘能力を削れるだけ削り、撤退させた所で動きを止め、テメエの『宝

具』で支配下に置くつもりだったんだろうが……罾の配置をもっと均等にすべきだったな。どこら辺にいるのか、容易く見当がついちまう。んで、およその位置さえ分かっちゃまえば、そこからテメエを炙り出すのは簡単だ」

どうやらランサーは先程放った探知系の魔術と同時に、姿を晦まし続けていたキャスターの居場所までも発見し得る程高性能の魔術を刻んだ宝石も放っていたようだ。……戦神オーディンが創りし『原初のルーン』……。火力がなくとも、その性能は、現代の魔術どころかキャスターの魔術さえ上回るものなのか。

「——さて、変な気は起こすなよ、キャスター」

ランサーが、その手に握る魔槍に魔力を纏わせ始める。余りにも濃密な『死』の気配に、キャスターの頬を冷や汗が伝う。

「テメエが何をしようとも、この槍からは逃げられねえぞ」

ランサーの宝具、因果逆転の呪い。命あるものが、逃れる事は能わない。……どこぞのバカを除いて。

「……何故、殺さないのかしら？」

「いや、何。オレが受けたオーダーはその小僧を逃がす事だけだからな。わざわざテメエを殺さなきゃならん義理はねえ」

ランサーがそう言うのと、少し間を置いて、キャスターは——愉快げに笑い始め

た。

「フフフ、アハハ!! 分かったわ、降参よ。何処へでも行きなさいな、坊や。それに、お嬢ちゃんも」

「——え?」

先程までの態度とは打って変わったそのアツサリとした言葉に、思わず戸惑ってしまった。何か裏があるのではないかという考えがよぎったが、ランサーに槍を向けられている以上、下手な事は出来ないだろう。事態が悪化する前に、早く逃げるべきだ。

「行こう、イリヤ」

「……………うん」

そうして俺は、イリヤの華奢な体を抱きかかえながら、足早に柳洞寺を後にした。